古史傳

自第百卅二段
至第百卅四段

卅六

歷和茅三号

和書門	
類	
號	四二五一八
函	一三一
架	一二
冊	四〇

內閣文庫		
和書		
類		
號	四二五一八	
冊	四〇	
函	一四〇	
架	一六	

內閣文庫		
番號	和 42518	
冊數	40(29)	
函號	140	185

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

古史傳二十六上卷

平篤胤謹撰　男　鐵胤
孫　延胤　續攷

神代下六上卷（カミヨノシモツマキトイフマキ）

於是天照大御神（カミ）。高皇産靈神（タカミムスビノカミ）
コヽニアマテラスオホミカミ

生命以而。詔太子正哉吾勝勝
ノミコトモチテノリヒツギノミコヽサカアカツカチ

速日天忍穗耳命（ハヤビアメノオシホミヽノミコト）。曰。今白葦原（タマハクイマヽヲスアシハラノ）
ハヤビアメノオシホミヽノミコトニタマハクイマヽヲスアシハラノ

中國平訖。故隨言依賜出。降坐
而知看詔矣。爾天忍穗耳命白
出。吾者將降裝束出間。子生出
焉。名天邇岐志國邇岐志天津
日高日子番能邇邇藝命。亦云
天饒

石國饒石天津彦火瓊瓊杵命。
亦云天津彦火瓊瓊杵命。亦
云天津彦火瓊瓊杵根命。亦
云天津彦國光彦火瓊瓊杵命。亦
天出杵火火置瀨命。亦云天杵
瀨命。應降此御子白給矣。此御子
者。御合産巢日神出御女。萬幡

豐秋津比賣命出子。玉依毘賣命而。令生出御子也。天照大御神。高皇產靈神。特鍾憐愛而。奉崇養給矣。

於是は。上件くれ事ども。皆承ある言れ已。○太子は。師云日嗣御子ぉ已。其意は上ぉ云へゆ。第百十五段。天津日嗣の下に見るべし。

初の詔命ぉは。太子を云ぉを。皆申さびして。此ぉしも如此申せぉた。初の時た。未御事依を受給た。ぬ頃よて。太子ぉ坐び。此は。前ぉ既よ御事依を受賜ひて。太子ゐ坐故ぉるぼし。○平訖た。師云許登牟氣袁幣奴と訓べし。○白は。建御雷神。經津主神ぉ。復奏ちく を云ふ。隨言依賜之。ぉれ御言依ハ。既ぉ前よ有しを云ふ。故隨と云へゆ。○知看た。上ぉ出さ已。第十二段れ傳見べし。○吾者。師說よ。此者てふ辭。少穩ぉらび聞も。古語よは。かく。依處ぉも云しぉや。今者ぉど書る例よ。吾字よ添へさるものを。ぉのまど。此者は。前よ言依し給ひし隨よ。とも見えぬ。降ぉむ裝束せし間ぉ子生坐れぬ。此御子を降ぉて。吾

は降らじと思ふを言ふ辭と聞えと已。吾を記は僕と何れど其をこゝ吾我あどの字は替とる○將降裝束之間ハ。師云。久陀理那こを徵ふ既て云り。

年與曾比世志富杵爾。と訓べし。裝束れ事は。上ふ云へ已。第九十九段の傳見べし。○天邇岐志国邇岐志。師云。書紀は饒石と書ゆ。

此意れ稱名ふ法ゐし。但し石れ借字はて。志ハ廣し高しあどの志と同じ辞あり。是を書紀一書は。天国饒石とも有已。万葉十七は。能登国鳳至郡て。饒石河と云も已。○天津日高れ。師云。大祓詞は。大倭日高見之国を何る。加茂翁の考ふ。夜万登国ハ四方れ眞秀れるを稱て。天津日れ。虚空れ眞秀は高く在ゐどは譬云ふ已。常は日れ天の眞秀は在るを。日高しと云。おを古よゆ言れら子法言

を聞え。火く出見命。海神の空津日高と申せしを思ふ法し。はと景行天皇紀て。陸奥は日高見国。まと紀伊国は日高郡と云何るは。私記ふ云る如く。四方れ望高く遠き故ふてや名ゐけ〳〵む。と言れと法然も有ゐむ。然れど此れ御名も。天津日れ。高く天の眞秀らは坐を。望瞻奉るゞ如くふる由れ稱名とれゐし。師云。此御名を。日本紀て。天津彦〳〵云くと有るを以て。此日高を。比古を訓べしと云。人何をど。ふ〳〵れ天字を已子字まで。皆訓ふるは。高字一れみ。音は訓べき理已ふし。海神段の凡て日高て。ふ語て。猶異ふる意も有げ日高も同じ。

ふ思ゆれを。未思ひ得とる説も有し。大祓詞の日高見国は。説ども何をを。皆已ろし。はと紀伊国日高郡ハ。續紀三ふ。飯高を何已。飯高の

伊を省けど。即日高なり。故元正天皇は御諱。氷高皇女なり。飯高とも云ひ。是に依て思ふに。凡て日高てふ言は。實は飯高は意なりも知がたし。此は天津日高と云る天津は日高に係る言に非ずとせむも妨なし。下に此御名を。ちなみ伊勢に飯高郡天津日子番能云々とも有まばなり。ちなみ伊勢に飯高郡云ひ。倭姫命世記に。飯高縣造祖乙加豆知命乎。汝国名何問賜。白久意須比飯高国止白而。進神田並神戸。倭姫命。飯高志止白事。貴止悦賜支。と云る貴しと悦賜ふと云ふと犯ぜ。此の考へに由有げなり。故後の考へは考めに驚かし置なり。儀式帳に。意須比を忍と云りて。倭姫命云々と云語れし。式に陸奥国桃生郡に日高見神社云り。また常陸に日高之国と云ることを。彼国の風土記に見えて。仙覚抄に引り。また豊後国郡名。日高比多と和名抄に見も。風土記に。日田と云り。是に依て思ふに。飛騨も日高国なり。是にちて此命は御子。火遠理命は示御名をも。天津日高云々と申しぼと虚空津日高とも申し。鵜草葺不合命をも。天津日高云々と申せり。○日子師云凡て男に比古女に比賣と云は美稱にて。比をは凡て物の靈異なるを云ふ。天照大御神の御事を。神代紀に。二神喜曰。吾息雖多。未有若此靈異之兒。また有靈異之威。とも云り。清寧天皇紀に。於諸子中。特所靈異。などいる意にて。比古比賣は。靈異之兒と云意なり。れは比の意。高皇産靈神の下に考へ合べし。ちて此日子をば下屬けて讀べし。○番能邇々藝命。師云。御名義穂之丹饒にて。稲穂に因まる御名なり。今云。迹迹藝を。

もぞ丹饒君と釈れた丹をば穂の赤熟たるを云ふ。凡て
れど、其説は取らじ。
草木なた人の顔なども色付にほふを邇と云ことぞ。狭丹頬
歴黄葉垣津旗丹頬合。また丹穂面など万葉に有が如し
此御名の番な始として、次々の神たちの御名書紀には
ミ火火と作れども、火須勢理命火遠理命の餘は、火ヲ由
縁なくれば、皆借字なり。古事記に火遠理命亦名天津日
高日子穂々出見命とある、火遠理は、火に由れる御名穂
穂手見は、火に由まる御名に非るが故ヲ、同じ続なまど
も、字を易て穂々と書り。是にて餘も、火は借字の係ことを
を知べし。凡て古の御天降段には、稲穂に因まる事の多きと。
上にも下にも云なを考合はべし。此御名の義、書紀に火
瓊々杵と書る字に就て云る説どもあれ、例のうるさ
死漢意にて云ふに足らじ。さちて此御名は後に稱申せ
なる名なる哉。神代紀の一書に、排披天八重雲以奉降。故
称此神曰天国饒石彦云々とあるが如し。今

此に父尊の答白し賜ふる御言に、かく告賜ふさまに記
せなは違ずるに似たれども、斯なきをば後を以て前ず
も廻らし云ふ常の例なり。○分注に載せる亦名五おは
上に準ずて其義いと著れるが。天之杵火火置瀬命天杵
瀬命と申は御名は、上に異なり。然れど意は同じ。其は師
説に、杵は穎の約れるなり。祝詞等に、千穎八百穎とも汁
爾母穎爾母とも云ひて、穂と同物なり。然まぞ富そは穂
名。加比は其躰を云名にて、言の意異なり。瀬は稲の切り
穎のこと。師の祝詞考に委く見えたり。出さる兒を云
とあふて早稲などの例なり。置は祝詞に、稲のきを奥
津御年とある。奥の意かぞ有り。また師説に、書紀ヲは、かく様々に有れども、日高

と申はむ一ッもおし。下れる虚空日高をも。虚空彦とゐり。抑古事記は日高とゐるを。書紀りハ彦とあるを。當代の御諱を避て撰者の改められとるおはべし。けて古語拾遺は。天津彦尊を申せ卍。○萬幡豐秋津比賣命。玉依毘賣命れことは既ふ上ふ出とめ。第三十七段の傳見べし。○特鍾憐愛而て舊訓は。許登爾米具志斗淤母保斯氐。と訓るふ從ふぢし。前ふ鍾字を省きて。コトニメグミテ。と訓しむ惡りり卍。

万葉五巻は。父母乎美禮婆多布斗斯。妻子美禮婆。米具斯宇都久志余能奈迦波。加久叙許等和理云く。

十一巻ふ。人毛無古郷爾有人乎。愍久也君之戀爾令死。ぞゐの卍。米具斯愍久。おれじ言れ活きふて。米具美と云も同語ふめ。今も出羽の秋田はてて。兒まと小き物ふぞを。米具伎物とも。米具志とも。常はいひ。まと稚子を。愍を。米基ふども呼め卍。其れ米具伎子。と云。意と聞えとり。愍くや君ぐ恋は死せむの哥を。畧解は解きて。兒ぐ〜は集中は。米具斯とゐるふ同じ。今俗りむどしを云ふ言ふるを。此も吾ぐう了取て云卍と解しハ然る說りて。俗は。年碁志。年碁伎事。年碁伎目ふぞ云語も。是より出とる語ふはべし。けて此を米具美。米具年れど活用りし云ふは就て思ふは。語のもをは。眼組ふは非ざはゐの。其は稚兒れ更ふ卍。小き美志れ物なぞ。眼を組ひそ兒て。愛見る意れ有れぞれめ。まと万葉九巻筑波嶺の嬢哥哥は。他妻ふ。ふ吾も交ふむ。吾妻了他も言問了云く。今日れみれ目串も物見そ。事も咎むふ。と云ひ十一巻は。妹も吾も。心は同じ俱へまど。弥ふおりしく相見れぞ。常初花了情具之。眼具之もれしは愛けやち。と云る目串も勿見それ。他妻は交と。其父も見苦しと見ることを勿。と云る意。眼具之もふしは。妻と常ふ副ひ居れども。心苦し。目苦しと思ふことを無し。と云る了て上の米具斯とも異ふり。思ひ混ふべのらば。前ふ米具美をは。草木

あぎれ芽ぐむを。もと同言ふて。僅は芽ぐみ初と訓て愛く思もはよ卍轉りて。兒のいを稚きを。愛しみ思ことゐも言ふてやを說とはて惡ろ卍。○崇養を。加多氐比多斯と訓ゑるは。本書れ傍訓ふ依れり。れを崇神天皇紀ゐ。崇重を加多知阿賀米と訓み。欽明天皇紀ゐも。崇を加多氐を訓と卍。まとカタチを訓とる言義未思ひ得ゐど。若所も。これゐを有卍。くは日經ゐ。其は日を經て成長ゐ成しむる由ゐて。日足を同義ゐ卍。然れを崇字ゐまと古く三音れ假字て。アを用とはをカゐ誤りて。カタテを成れるゐ。若ちも有らば。見立給ゑは由ゐ卍。まと元く集ゐ。此文を三処ゐ引とるゐむ。スダテとゐり。スダテは育字をとみて。古言ゐ養を比多斯と訓むて。神代紀ゐ。天照れど。其も物どゐし。養を比多斯と訓むて。神代紀ゐ。天照大御神の。五柱男神を。悉是吾兒乃取而子養焉。とゐる所れ釋ゐ。私記云師說比太須者猶如日足也。言凡人子初生之時。日數最少。而漸く長養日數稍足。故謂養長其子爲日足耳。とゐる

ゐ依れ卍。

故是以隨白出。科詔日子番能邇邇藝命而。奉坐天都高御座

而。此豐葦原水穗國者。汝將知
國也言依賜。故隨命而。可降
焉詔而。天兒屋命。天太玉命。天
宇受賣命。伊斯許理度賣命。玉
祖命。幷五伴緒。天忍日命。及諸

部緒。出神等支加而。以其遠岐
出八咫鏡。及天蓼雲劒。二種出
神寶。永令爲天都御璽而。示副
賜其遠岐出八尺勾璁。及平國
出廣矛。常世思兼神。布刀玉神。

天手力男神。萬幡豐秋津比賣神。護齋坐鏡三面。子鈴一合。又天照大御神。勅曰吾天原所御。齋庭坐穗示。當御吾兒而。依賜矣。

故是以は。上れ應降此御子とおのる處を承とゐ。○科詔ハ。師云美許登淤富世氏と訓ばし。淤富世ハ。令負れ意ゐ。仰課ゐおとも。言の意ハれ。負れ持を同じけまど。詔命を負持ちむるを。淤富世と云ゆ。宰れど云も。詔命を負持て。其處の政を行ふ故の名ゐ。心ゐ。字ハ同じ。科字ハ。此れ意ゐれ當む故ゐ。字ゐは拘れらで書ゐれ。古の常ゐり。科ゐ淤富世と訓む。品〻ゐ分ちて。某〻ゐ云付るゐ〻ろゐり。ちて此ゐ。詔とのみは云ばて。此言を加ゐるは。始ゐ忍穗耳命ゐ詔ひし。御事依れ詔命を。更ゐて此尊ゐ令負る意ゐ。然れど此處れ。詔とれみ云てれ。何とゐや言足ゐ。ちばる處ぞかし。ちて父尊ゐ代て。此尊を降し奉る賜ふれ。如何ゐる故ゐ。傳へけ

きば測ひがあし。此御子聖德坐故に。代〻て降し給ふれど云て。例の漢意れ推量まして。當らぬ事あひ。御子を聖德ありと称奉るれ。御父を聖德あしと申ひは非ぞや。ひのあ可畏。こあ私事あり。○奉坐天都高御座而。天都高御座とは。天れ高ち御座と云、ふて。此は天照大御神の。天ふて。大御政事きおし看ひ御座あふを。皇美麻邇〻藝命ふ授賜ひ。令坐奉ひ給へる義ふて。即謂もる御即位ふひ。あれ師も既く歷朝詔詞解ふ。天皇大御神の御坐ひ御座を。受傳へ坐ひ義を。其は歷朝の天もて。高御座とれ申ひあり。と言れとめ。皇命れ。始め高御座ふ即賜ふ時の詔詞を。續紀ふひの乃ふ載らまとふ中ふ。文武天皇紀ふ。天之眞宗豐祖父天皇。高天原廣野姫天皇十一年。立爲皇太子。八月甲子朔受禪即位。庚辰詔曰。とひのひて。此れ文を甚く約めて引とり。豐野姫天皇ぞれ。持統天皇の大御名あり。其詔詞ふ。高天原爾事始而。天皇御子之阿禮坐牟彌繼〻爾。大八島國將知次止。天坐神之依之奉之隨。師云天坐神れ。他の詔ふ。天坐神。國坐神ふど廣く云るとハ。心ばは異ふり。ふく〻れ諸詔詞ふ。高天原ふ神積坐云〻ぞひる天神ふて。もはら天照大御神。高皇產靈神をさして申せふあり。ふく〻天神と云ばして。天坐と云るハ。下れ天都神と。同言の重ふあふ故ふ。少し易て申せるふひ。遠天皇祖御世御世。中今至麻氐爾。天都神乃御子隨母聞看來。天津日嗣高御座之業止。高御座の業とハ。天皇の此御座ふ坐まして。天の下を治めさせ給ふ御業を申ひあり。其御業ハ。即下文まと本文ふ見えあるが如し。現御神止。大八嶋國所知看。倭根子天皇命乃。授賜比貢賜布。貴支高支廣支厚支大命乎。師云。現御神止れ。止

は尓氏と云むゲ如し。他の詔ひハ。現御神止坐而とも有
ピ。此言ハ。天皇れ世よ現しく坐まに御神ふして。天の下
をたろし看に由あり。現人神とあるも同じ意あり。天皇
命ハ。ちゝれ持統天皇をちして申し給ふれピ。倭根子と
申れ。御世の天皇れ通ふ御号あり。授賜比れ。持
統天皇の。文武天皇よ授奉り給ふれピ。此高御座の御業
れ高天原よ事始めて。云ゝれ御業ぞ
として授け給ふと云ふ文の續あピ。受賜利恐坐氐。此乃
食国天下乎。調賜比平賜比。天下乃公民乎。恵賜比撫賜牟
止奈毋。隨神所思行佐久止詔布。天皇大命乎。諸聞食止勅
ぞ。此れ師の詔詞解よりて。文の序を目易く改終。
ピ。脱とる語をも加ふを引さゆ。本書とやゝ易れる
を異むこ
とゆれ。此詔詞れ初よ。高天原爾云ゝぞ云件れ。此時高
天原よて。邇ゝ藝命を。天皇命れ御位ふ卽奉り給ひて。生
坐む御子の繼ゝ。此御座ふ坐て。大八嶋国たろし看せと。

言依し賜ふる由を詔ひ。其奉しき趣れ。此の段をり次ゝ
の傳よ。說もて行くゲおぞし。
次ふ遠天皇祖御世。云ゝと云件れ。邇ゝ藝命を卩次ゝ。遠
天皇祖とちれ御ゝ世ゝ。中世今よ至まて。天都神の御子
れのらよ聞看來れる。天津日嗣。高御座れ御業ある由を
詔ひ。天都神の御子とハ。卽天子と云ゲ如し。斯て此高御
座よ御坐して。天下の百姓を撫恵み。治させ給ふ御
業れ。卽天皇命れ御職業あり。此御職よ坐まに。幾万世
の御代を經とも。天照大御神れ御子ふ坐あり。是をもて。
天都神乃御子隨毋。
とれ詔へるあり。次ふ現御神止。云ゝぞ云件れ。前れ天
皇命の。太子ふ。天都高御座の御業を。授け負せ賜ふ由を
詔ひ。御文よ負賜布とあるハ。師說れ如く。負持しめ給ふ
由あること。上の本文よ。科詔とある所よ注せる歟
合せ考ふば。常よ仰せと云ふ言も。もと其事を負
持しむる由ふて。おぞを同言れるこぞ師說の如し。次ふ。

受賜利恐坐氐云〻を云件て。日嗣御子れ。天津高御座を受賜はゞ坐て。前御代まで。爲行ひ來ませる御業の隨ふ。天下を調ゑ平賜ひ。天下れ公民を撫恵み。治免賜て。と所思ゞ由を。諸聞持てをと詔ゑる処。御代〻の御即位れ時れ詔詞も。其時の趣をりて。少〻文を改免給ふ事も有れど。其大旨は違ふこと無きあり。然れど。此詔詞れ趣きを。次〻れ本文とを相照して。皇美麻命を。高御座ふ即奉ゞ賜ひて。天降坐し免給ゑゞし。天皇祖神とちれ神慮を。伺ひ奉るぢき事よおそ。○此豐葦原水穂国者云〻。おは上よ同文あゆて。其處ふ委く注せる如く。天照大御神の。前ふ忍穂耳命よ。豐葦原水穂国者。我御子之可知国

也。と詔ゑふ御言を承て。高皇産靈神の宣ふ御語あゞ。委く（は第百六段の傳よ注せるを見べし。）故おれ文義て。此豐葦原水穂国て。汝れ知さむ国あゞと。大御神の言依賜へる国ふをバ。其命の隨よ。天降坐ぢしを詔ゑる処。さをバ下文よ五伴緒を始免。子鈴一合を副給ふまで。皆大御神の御旨を承て。高皇産靈神の物し給へるふれこと。文れ趣ゑ。深く心を付て辨ふべし。此豐葦原水穂国を詔ゑる此字のおをばと此国名れ事も。既よ上ゑ云ゞ。是まと第百六段の傳を見て知べし。抑これ御天降のこを。熟〻それ事縁を稽ふるよ。はゞ天之御中主神。それ始ふく。高天の神祖と坐まして。皇産靈大神女男二神を生し給へふよ。此二柱大神。まゐ伊邪那岐伊邪那美

二神を生し給ひ。国土を生造し給へる事。まさとふは
青人草を生成して。住し給はむの神意あるし故に。伊
邪那岐伊邪那美神。それ大御心を御心として。国生坐て
後直に青人草を生給ひ。万物まさ神々をも生給ふるは。
それ青人草を蕃息し賜むとれ御業なりし事は。既ふ
上に論ふるが如し。此事委くは第十段。生給八百万之神
の因りは往とある所の傳に云へり。其後にも事
往論ふゆゑ。斯て伊邪那岐大神御禊まして。天照大御神
と。速須佐之男命とを生給ひ。天照大御神に。天日れ御国
を治し給。須佐之男命に。天下をと言依し給ふるに。須佐
之男命。御母の由緒に。ふとりて。根国に往坐むと欲せるに

就て。大御神に御暇白し給ふと。天に昇りて。互に御誓れ
間に。忍穂耳命生坐しかば。二神御議りて坐る。此御子を葦
原中国に降して。天下治ためと定賜ふ事ハ。大
御父神の。恵く愛ふく所思ひ青人草を撫治め給むを
れ神慮ある事も。上に云ふが如し。大御神と須佐之男命
命に。天津日嗣を治し給むと。早く議り定め給へと所
思ふる事のゑしは。第三十五段。第六十三段。第六十四段。
第六十六段。第百六段の傳
をゑく読味へて辨ふべし。然れど此時。邇々藝命を天降
ふ給ふる事は。皇産霊神れ神慮を承て。伊邪那岐神の愛
しみ所思看ひ青人草百姓を。天照大御神。まさ其御心を
うけて恵く思ふし。其人民どもの徒に殖蕃りて猥雑に

良むを。綏治免給はむ爲よ。それ貴子と養し給へる。御孫命を降し給へる御事ゐぞ有けゐ。偖かく言もて行くゐ。大御神の此事をし詔ひ出さるゝ。伊邪那岐神の御心を嗣給へるゐハ有まゞ。其本れ故よしを思へゞ。やゞて產霊大神れ神意を行ひ給ふ理りて。かの顯宗天皇れ御世ゐ。我ゞ祖高皇產霊神。天地を鎔造ませる功ゐまバ。御田を進まと御託し坐る事ゐも思合さゐ。此御天降の時しも。高皇產霊神。まと大御神の御心ゐけて。事狀り給ふこをハ。天照大御神れし。天ゐ御國の君ゐおはし坐て。御爭さの比類ゐく坐まゞ事ハ。申も更ゐまゞ。其故れみゐらゞ。請人草ゐ蕃息らし。治免給れむ事ハ。元々ゐ產霊神の御意ゐまバ。大御神れ御言のまゐ〳〵。如此物し給へるゐて。皆濱き所以ある事とこそ思れるゐ。是をもて上ゐ引とる御世初めれ詔詞ゐ。まゐ右れゐを。天皇命と御坐ゐを。天皇祖神の御依しゐ因をゐ本緣を告ゐ万ひ。然して此乃食國天下乎調賜比平賜比公民乎惠賜比撫賜牟。と所思ゞ由を勅ふれゐ。

師云食國とれ。おろし食ゞ國を云こをゐ。調賜比れ。他の詔ゐも。天下乎治賜比。まと上下乎奔倍和気氏。まと汝等乃心乎等〻能倍直之ゐど。見え万葉二ゐ。御軍士乎安騰毛比賜奔流。三卷ゐ。網引為跡網子調流海人之呼声十。卷ゐ。左男牡鹿之妻整登鳴。声之十九ゐ。物乃布能八十友之雄乎撫賜。等〻能倍賜。二十ゐ。安佐奈藝尓。可故等登能倍ゐど見も。是らを合せて思ふゐ。此言れよそゐ散け居る者を呼集めて。乱ゐ治むる意ゐ。其中ゐ呼來ゞ方を主をして云ゐると。乱ゐ治むる方を主として云ゐるとの異ゐるゐ。撫賜とハ。安ゐて撫るハ。愛みゐ憐むゐわざゐるゞ故ゐ。必しも撫ざまども。愛み憐むをかく云ゐ。万葉六ゐ。天皇朕宇頭乃御手以。搔撫曾。祢宜賜。打撫曾。祢宜賜。ゐどもあり。凡て此御天降ゐれ件〻。おれ心定をもて讀味ふ。ゐ。○天兒屋命とゐ。王祖命まで五神。こゐれ石屋戸れ段〻ゐ出さゐ神さちゐ。○伴緒。師云凡て伴とは。官職

ふはまを何よまれ一部ともれふを云ふ。某伴某伴を云ふ是あゞ。登毋賀狼あぞ云ふも此意。まと何とれく伴造と云は其部の長を云ふ。今云此事ハ第三十九段の傳よ委く注せり。て交り親む人を友と云も同じ意あり。緒は長の本語ふて。袁佐と云は長兄名れ意あゞ。書紀よ。魁帥渠帥あどを伊佐袁を訓るも勇長形り。然れど伴緒ハ其部屬れ長我云稱あゞ。師説よ此処の文を引て此五伴緒の中よ二柱れ女神あることを云ひまと祝辞ア比礼懸伴緒と云るも女れまど伴男あぞ〳〵書る男れ皆借字よて男女ふわゝる称あふ由云まとふハ信ア言あゞ。ちゑ緒と云ふ意は玉緒あぞ我袁と云も多くれらし。

玉れどを總縛る故の名。まと物れ長を袁を云母。其徒屬を統帥る故れ稱ふて。本同言れり。然れども何方を本とも未を母定ゑゞとし。

ちて今右れ五柱神を指て。五伴緒と云るは。石屋戸段ふ見えゑる如くふ。此神とち各掌れる職あゞて。其職〻れ部屬を帥る長神あまバ外ゞ。五神を指て五伴緒と云まゞ。一伴緒ハ一神あゞ。然れど伴緒とて。其長を云て。其部類を云ア非ること明ラ。書紀よ此を五部神と書れど。五伴緒は多く五神の意とも聞ゆるふ似とまぞも。彼も五神を挙て云れど。其意ア非ゑ。五部の長神と云意あり。

允恭天皇段ふ。定賜天下之八十友緒氏姓。をゐる八十友緒ハ。所有諸れ伴緒を總云あゞ。ちて是れ長よ限らび。部屬までよわとる如く聞ゆれど。是ら朝廷ア仕奉る官人とちを。大凡よ云。るふて。其れ何れもわどわどよ帥る部屬ゆまど。此も皆長あり。此外よ母部字れぞを書て。廣く其屬を云る如く聞ゆるも。皆くむしく云へバ其長れり。はと万葉ア多く。物部之八十伴男とをみ。師説よ古ハ文官武官を云れゑ。凡て諸臣を物部と云りとゐり。まゑ

七巻ふ。靫懸流伴雄廣伎大伴爾。ま為十九ふ。八十伴男者大王爾麻都呂布物跡定有官爾之在者云く。れど詠めど。此了官とあるも。長れある故れゆ。大殿祭祝詞の詞別ふ。皇御孫命。朝乃御膳夕乃御膳供奉流。比禮懸伴緒。禍懸伴緒。大祓詞よ。天皇朝廷爾仕奉留。比禮挂伴男。手禍挂伴男。靫負伴男。劔佩伴男伴男能八十伴男乎始氏官く爾仕奉留人等とてのる。此文いせ〳〵ぬでゐし。是ふ八十伴男乎始氏と云ふを以て。伴男は。其長れるおせを思ひ定むゐし。ちて次よ官く尓云くと云等よハ有り。○天忍日命。名義。忍ハ大の約れるよて。忍穂耳命れ忍ふ同く。日は例の奇靈ふる由れ稱名ゐ。れ不今一ッの

考へもてのゐ下よ注ふばし。ちて此神は。即天手力男命ふり。其由も何も。第百三十七段よ委く注ふばし。ちて上れ五伴緒の神等ハ。謂ゆふ文官れ趣ふるの。此神れ謂ゆる武官れ長れるおと。下ふ見ゆふ如し。○諸部緒之神等。おれ神代紀一書ふ。以天兒屋命。太玉命。及諸部神等。悉皆相授。とてのふを採れるこせ。徵ふ云へるゲ如し。この神代紀の傳ハ。五伴緒の中よ。重き天兒屋命。太玉命。れ名をれみ挙て。餘れ三伴緒れ神等の名をも。此諸部神等と云文よおぬとるふり。ちて此諸部緒れ。某〳〵と云こせ今委曲ふ知ばきふ非ざまども舊事紀の天神本紀ふ櫛玉饒速日命れ。天降らち〳〵時ふ。高皇産靈神れ勅もて。諸部の神等を供奉し奴おせ有る。其神名を見るよ。此處ふる諸

神等れ名をも悉出せ已。故按ふるに。彼謂ゆる供奉神とは。疑ふく。邇〻藝命の御供ゐ立ち〻神等ゐる歟。其事れ二典に洩さゐず。餘書に有しを撫ひて。妄説なも加ゐて饒速日命れ供奉と爲さる物ゐ已。饒速日命れ神武天皇卷に記せる如く。物部氏の祖ゐるを。彼舊事紀れ其裔の氏人の偽書ゐる故ゐ。然る妄事なむ為さるゐり。但し此書妄説ハ多れ也ども。中に れ他の古書に見ざる正ゐき古傳を撫ひ載せる玄少ゐら玄。其れ記傳の首卷まと予ゲ開題記に論へゐ見し。故今それ妄説どもを除て。信然も有ゐしと所思も限已を抄し出むに。ま於謂ゆる三十二神の中ゐ。十四神あり。其れ天香語山命尾張連等祖。此命れ事第三十七段の傳に云へり。さて香山命。やゐて石凝姥命あり。其由ハ。第四十六段の傳に云へ已。天牟羅雲命。度會神主等祖。此命のこと。第百三十七段れ傳に云べし。天神立命。山背久我直等祖。此命のこと。第六十一段れ傳に云へり。天御陰命。凡河内直等祖。この命れゐと。第三十九段れ傳に云へり。天湯津彦命。安藝国造等祖。此命の事ハ。成務天皇卷五年れ所ゐ云べし。傳ゐ云ゐ已。天三降命。豐国宇佐国造等祖。この命の事。第百四段れ傳ゐい ゐ已。天活玉命。新田部直等祖。此命のことも。第百四段れ傳に云へり。天表春命。八意思兼神兒。信乃阿智祝部等祖。天下春命。八意思兼神兒。武藏秩父国造等祖。おの命ゐちれ事れ。第四十四段の傳ゐ云へり。天八坂彦命。伊勢神麻續連等祖。此命のこと。第四十九段れ傳ゐいへり。天伊佐布魂命。倭文連等祖。おれ手力男命の示名ゐるゐ。此事も第四十九段の傳に云へり。天事湯彦命。畝尾連等祖。此命れ事。第六十段の傳ゐ云ゐ。畝を印本に取ゐ誤れり。今れ新井君美れ古史通ゐ引ゐる本ゐ依ゐ已。天王櫛彦命。間

人連等祖、此命のこと、欽明天皇、天椹野命、中跡直等祖。此巻に云ふを見べし。未考へず。元く集ふ引とるを島と作り、孰きを是なを知らず。跡

是ら供奉、神の中に有

ては。然も有れむと所思もる神名の限ぴ外り。此外に十八神の名

なるが中に天、兒屋、命天、太玉、命天、鈿賣、命天、明玉、命天、糠戸、命れ名なるは。元とり五部、緒の神あまむ宜し。但し天、糠戸、命と云む石凝姥、命の父神あるに其子を挙げ云て、此名を出せるは神代紀れ一説に糠戸、神に鏡を造し云めて、と傳へも有れば。其由第四十六段に説と見る戎し。次に天、櫛玉、命天、神玉、命。まと天、神魂、命と云ふ名を出せれど玉を竈と字こそ異れ同訓にて共に太玉、命の亦名あるこを第六十一段の傳に云るが如し。次に天、道根、命と云は手置帆負、命れ末裔ある名。此の供奉、神に名せるむ誤れり。其れ第五十段れ傳を見て知べし。次に天、斗麻弥、命と云は天、御陰、命れ亦、名れまむ此を挙と云て重復あ。次に天、背男、命と云む天、手力男、命の亦、名あるを別神とも挙げて挙ると誤あり。此は第五十七段れ傳を見て知ばし。偖右の名るも誤を此れ供奉、神れ列に挙とる傳こを

そ誤りあ。皆正しき證ある名くあるを。猶あの外に天、造日女、命天、世手、命天、乳速日、命天、伊岐志、迩保、命天、少彦根、命天、日神、命天、月神、命と云る七名む全く信られば。然る其裔として挙とる諸姓も皆達ぎ上に古書に證安べき事の無れむあ。殊に甚しきは天、日神、命と云を對馬、縣主等、祖と云ひ天、月神、命と云を壹岐、縣主等、祖と云る。顕宗天皇、紀に日、神月、神れ御託あ。し時に對馬、縣直と壹岐、縣主とふ祠らし給へる事に依て作れ云る妄誕あり。天、少彦根、命の根を元く集に引とる作。然して此を鳥取、連等、祖と為り。少彦名、命あむ名鳥取、連ぐ祖あらむや。此らに準ぎて天、造日女、命と云に三十二神を合せ下四名の妄をも辨ふべし。按ふ舊事紀に三十三天の名を具ぎとる。印度籍の古説に忉利天を三十三天と云は天帝釈む中央に住みて其四埵に八神ぶ。三十二天と云と見えて神住て天帝に仕ふる故に三十三天と云ふ本ぶきて饒速日、命と三十二神を合せては三十三れ數に合ふ故に此説を造りて載と。也然まむ此む天竺説を。何に知れる世に。おりての妄誕あること著明あ。

ちて右れ神名を竝挙とる。次に載せる。五部人。五部

造天物部等二十五部人船長梶取船子おぞは信ふ饒速日命れ供奉おぴれむと所思ゐる由ゐまば此はた抄出ぴふむ其れ神武天皇巻饒速日命の所ふ委く説辨ふるを見て知るべし然れど饒速日命の供奉どふ然ばかぴ多有しろば此時の御天降ふ御從れ多有し事云も更おぴ是を以て諸部之神等とはゐはおぴ○支加而は師云久麻理久波幣氏と訓ぱし久麻理ハ久婆理ふり支は字書ふ分也とも注して凡て物れ分ふ〳〵意ふ用ふはる字おぴ人の手足を云も木枝を云もみお本れ分ふ〳〵意をり出とぴ王延寿グ魯霊光殿賦ふ支離分赴注ふ支離分散也おども云へり ちて上水分神注ふ訓分云久麻理ぞ有れど久麻流れ分れことおぴ然れば此五伴長神を其職〳〵れ長ふ分配て御孫命の御從ふ加牙給ふ外ぴ書紀ふれ凡五部神使配侍と云ぴ此配侍字と相照して支ハ必久麻理と訓べき事を知ぱく又彼配侍をも久麻理久波幣多麻布と訓ぴれこをも辨ふべし佐志久波幣と訓るハ甚く非おり支字佐志と訓ぱき由あらむや ちて此五伴緒神の掌ぴ給ふ職れ みお神事ふ依まは れど今支加而降し給ふも專神事の料外ぴ今云神事の料れみお非ぱ御孫命の天下治免給ふ御政を介けし免給れむとおぴ斯て神事やグて天下を治免給ふ御政の本おまば師言れ如く云むも難おふれど少ろ言足らぬ〳〵ちぞぱる○其とは師云石屋戸段の事を指て云おまど加能と訓ぱし まと上の五伴緒神卽れば直ふ上文を指て其神とちの意とも為べ〳〵まば曾能と訓むも惡ろらじ 彼段ふ遠伎し神等おは遠伎しと云○遠岐之第四十四段ふ注せる師説れ如く凡て物を招寄ぱる

事ふて。此はかの石屋ふ幽居せる。天照大御神を。招出し奉ひし行事を云ふひ。之は過往し事を云と。其の辭ふひ。謂ゆる過去の斯あり ○八咫鏡を。彼石屋戸段ふ。科石凝度賣命令作て。眞賢木ゝ中枝ふ取繫し鏡ふひ。當時ふを用ひて。大御神を招禱奉ひし故ふ。遠岐し鏡とゝ云ひ。○及天蓼雲劒とは。此劒ゝかの須佐之男命の。八俣遠呂智を切給ひし時ふ。其尾中ゝゆ得給ひて。異物と持齋ゝ給ひしを。後ふ天照大御神ふ獻り給ひし大刀ふひ。ちて鏡と劒との上の違岐之の言。鏡ふのみ係ひて。劒ハ異時の物ふ故ふ。其を隔てむ為ふるゞ。此ゝ古事記の文法ゝ效へるふゆ。猶徵ふ云るを見べし。○二種之神寶ハ。卽上ゝ鏡劒を申せひ。世ふ三種の神宝とゝゝみ云ひ效ふるゝ。後の趣ふ依て申ゝふること。下ふ辨ふるゞ如し。○永令爲天都御璽而は。其鏡劒の二種を皇美麻命ゝ御〻代〻繼〻ふ。天都日嗣ゝ高御座ふ御坐ゝ神璽ふ令爲とて賜へふ由ふひ。ゝれふ下ゝ師說ふ引とる文○示副賜其遠岐之八尺勾璁云〻は。上ゝ鏡劒を神璽とゝて授賜へるゞ且ふ。示是らゝ物をも副賜へる由ふひ。八尺勾璁ハ。かゝ石屋戸段ふ。科玉祖命令作て。眞賢木ゝ上枝ふ取著し玉ふひ。此も大御神を招奉るふ用し物ふる故ゝ。其遠岐之とは云ひ。然るふ此勾璁を。或ゝ伊邪那岐命の。天照大御神ふ賜ゝふ御頸玉ふりを。或ハ須佐之男命と。誓約とゝひし時ゝ曲玉ゝれひとし。或ゝ大己貴命ゝ献ひし曲玉ふりとゝふハ。師言の如く。皆此の遠岐斯てふ言を。得心得ぬ故の

推當の非説あり。けて古事記ふ。賜其遠岐斯八尺勾璁鏡及草那藝劔と見え。神代紀よも。賜八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劔三種寶物を有はふ就て。師説ふ。此三種を連舉る次第た。鏡劔玉とこの。鏡玉劔とう有ばき理ふるよ。記紀をもふ。玉を先ふし。紀ては殊ふ。玉及鏡と。鏡の上て及字をさ矛置れとるた。如何と云て。崇神天皇れ御代ふ至ぴて此御鏡劔をば。他處ふ齋祭ぴ給てとぴ。天皇れ御許よ坐は。神代れ舊物よを坐さぴ。唯玉れふれみぞ。今大御神の授賜矛る隨の物ふて坐ぎ故ふ。彼御世をめたては。三種れ中ふ。玉を第一とぞ爲られ〻む然きば其御代をぴ後た。常よ玉殊先ふ申れらひあはふ。其次第れまゝふ。記紀とめて記せる物てを。神代をぴ然るよた非ぎふむ。然るを或説よ。本來玉殊。鏡をりも殊よ重き物の如く説成し。師の祝詞考よ。伊邪那岐命の天照大御神よ賜矛る御頸玉た。大御神の天を知食ば御璽ふぴ。今天孫ふ賜ふ勾玉ハ。天岩戸前よて。招祷せし時。の大御神れ御頸玉よ準へて作ぴしを。今天孫天降りて。国れ主とふり給ふ御璽よ。大御神これを賜ハせしふぴ。と言きとるも皆ろふハぎ。其故た。岩屋戸段の勾玉た。彼御頸玉よ準矛て作ぴしと云こと徵據ふし。彼段を考るよ。此玉。さふ意よ矛作れるよた非ぎ。凡て玉た。古殊よ賞て。世ふ矛み欲ぎる物ふはふ故て。御幣よ献ぴしれみふ。ぴ。然れど殊よ比ふく重き招祷よ用る故て。心を尽して作きるろ。有ば中よも珍と美麗き玉ふりける故よ。大御神の殊よ珍しみ給ひて。比ふ紀御宝物よて有々はふ。ぎ。此度御孫命ふ賜ハせるよこそ有々め。異ふる意ふるべくも非ぎ。故古事記書紀ともふ。此次れ詔命よた。ゑぎ御鏡の事れみ有りて。此玉れ事は見えば。若古の玉御国知食ば御璽とふらバ。必其事も詔ふべき理ふらぎや。

然るを彼、御頸玉より準ずて、是をも御国知食す御璽とす
て、賜ひしと云へり。記紀ともに、三種の第一に挙られ
たる故に、強て其意に叶へむとて、大御神れ御魂とする御鏡
食む御璽として賜へりと。又有べき。然れども其鏡に並
の上に立むことを難くす。自ずから御国
ばて賜はせし。一種の御宝物に有るべ。自ずから御国
知食す御璽とすべき理あり。元とり然するべき理あり。けて
右の餘に此三種に於きてハ猶くさ〳〵の理をおちと
く説る説ども多かれ
ど、皆古意に非ずあむ。今此ふ大御神れ授賜ふ時をもて
言は〳〵鏡第一れるおとは更ずあ。次ては劔それ次に玉
れるばし。其故に大殿祭祝詞に天津璽乃劔鏡を捧持賜
天云〳〵神祇令に凡践祚之日。中臣奏天神之壽詞忌部上
神璽之鏡劔。義解に此即以鏡劔称璽。繼體天皇紀に大伴金村大連乃
跪上天子鏡劔璽符再拜ずとあ。神祇令まと祝詞の文を以て見れば。繼躰天

皇紀ある璽符も。即鏡劔を指て云へるか。ゑ
とひ玉れりとも。鏡劔の次にあるをや。おきら。鏡劔れ
みを云ひて玉を云ば。此れ三種の中には。玉れ本は輕き
ば故ずあ。今云ふ〳〵とも祝詞考れ説の誤りを辨へられ
とる。長き説あり。皆理とる説ずあ。記傳十五の
二十五葉を見べし。然れ有れども。天皇れ大御許ずしては。此玉れ
みぞ。今に至るまで。大御神の授賜へ。隨の物に坐ま
せば傳持給ふ三種れ御璽れ中に殊に貴き御寶ずあ
け。後世に神璽と申れ。ぞ言れしハ昔に比ずき考へれ
ゆかし。ちて八尺勾璁の下に。及字を加へるハ。遠岐之
れ。此玉の御事ずり。璁れみに係ることを。知せむとの所為にして。
平国之廣示より。子鈴一合までに係る辞ずあ。○平国之廣示ぞは。此御示は。上
ふ大国主神。既ふ天神の大詔命に歸順まして。天神之御

子ゐ国避ひ給ふ時よ。常ゐ杖給ふひし平国之廣矛を。健御雷神経津主神ゐ授けて。天神よ獻ゆ給ひ。吾以此矛卒有治功。天孫若用此矛治国者。必當平安。と宣へる御矛を。今出して副賜ふ処ひ。此御矛の出さる本は。第九十六段る事は。第百二十三段の傳よいふゆ。其は古語拾遺ゐ。大国主神。平国矛哉。二神ゐ授けて。右れおと白し給へる事を記して。直ゐ此御天降の事ゐ及び。即以八咫鏡及草薙劍二種神寶授賜皇孫。永爲天璽。所謂神璽之鏡劍是也。矛玉自從。とゐ以て知るべし。師云。此拾遺の文は世よ玉を第一を思ふゲ。古意は非ざる事を慨みて。殊更ゐ玉を貶して。鏡劍ゐハ比び難きと知せとる文ゐひ。自從ふとハ。鏡劍の如く正しく御璽として賜へるよ非ず。矛を玉をハ。只それゐ添て賜へる由ゐり。

けて此御矛れこと。私記よ。今在何處哉と問ゐ。ゐ答ゐ。雖爲三種寶物之外。此矛有治国之名。己奉獻天孫。定傳之後葉歟。然而所在不詳。但如此神器。上古多納石上神宮。若今彼神宮歟と有れど。其所在詳ゐ知られて。既ゐ云ゐ。ゆ。第百三十段の傳見べし。○常世思兼神。師説の如く。常世をはかれ天照大御神。石屋ゐ隱坐て。世間常世ゐひし時ゐ。功績を立し神ゐる故よ云ひ。此言先は。思兼神一柱よ係れひと見も。然れどまと。下ゐる神とちまでよ係て見むも惡ゝらじ。けて此思兼神をゆ下。四柱神は。其現御身を云ゐ。ゐ非ず。上れ五伴緒の列をは別よ。また其御靈實を降し給ふひ。今云。御靈宮とハ。御靈の託る御躰を云ふ。下ゐれ同じ。

俗に云ふる神社の御神躰あり。故上れ五伴緒の所とは。文を隔て。御寶ぎもれ次に連祐云へり。然まば此四柱神れ御雲宗どもハ。鏡に添て降し給ふ。鏡よまれ。劔よはれ。何にまま彼八咫鏡に添て從へて降し給ふ。其由れ下に云へり。はと彼五伴緒神と。天忍日命は。現御身ある故に。古事記に。此次に。各某氏之祖を注しある。常世思兼神などれ。御靈體ある故に。子孫をば舉げ。只それ鎮座に處を注せり。上に往く云る如く。凡て神ふれ。現身を云と。御靈と。れ差別あれども。其分ちを云ば。共に同じさまに。某神と云る故ぞ。天照大御神なば。高天原に坐に現御身を。も。はと伊勢に拜祭る御靈をも。共に天照大御神と申して。其御名には差別ある如く。他神も然ある。世々の識者。この差別を得辨へざるの故に。事にふまて。混はしき事多ぞ。し。神代紀に。五部神れ舉されども。此等れ御名を舉ざるも。現御身に非ざるの故ぞ。此等を以て。現身と御靈とれ差別あるあとを覺ばし。抑今かく云ふ說ぞも。凡て師說を翻按へる說ども。ある。此れ古史徵に。委く論へる如く。師れ古事記の此段に。脫ある事多く。其うに兒屋命と思兼神と。同神に坐ことを考へ得られ。然るに此成文れ。古事記に洩る傳を補ひ。兒屋命と思兼命と。同神ある事を考に得て記せる故に。其說や〳〵違ふ。ことを能ハず。然まども此段の神名ハ。現身と御靈との差別ある由を考へ得られし說れ。万世に通りて。動くまじき說ふまだ。用むとれる。右れ謂ある故に。其隨に。れ書写れこと能ハず。已に考に合せて。や〳〵語を易る事もなまだ。師云ふ舉むと如何ふ故に。已に說のおとれて此段の徵。記せり。見む人それ心して見分べし。

まと第六十段れ傳に。委曲に辨へる如く。天兒屋命。思兼神れ同神ふに。古事記に其二名を舉て。現身れ所には。天兒屋命と記し。御靈れ所に。常世思兼神と記せる

た。現身を御靈との差別を令知さる文ゐ。其た兒屋命と申に名た。此神天降らゝよ。以來ひろく此御名をもて語り傳ゐし故よ。現身の所よ此名を記し。思兼神と申に名た。此神かの石屋戸段ゐ始免て御名の出とるより。平國の事よ於きても。思ひ議りの御功高く。今それ事竟て。かく御天降れ事よ外きる故よ。其御靈を降し給ふ所よた。其方の御名を以て記せゐ物ゐるゞ。現身れ所ゐハ命と書き。御靈れ所ゐた神と書ゐも。心ゐりし文法ゐりを見も。故己ゞ成文よも。其文法よ効ひて記せゐ。けて古事記ゐ。常世思金神の次ゐ。手力男神。天石門別神の二名を出せれど。此た同神れ異名ゐきバ。一名を除き。布刀玉神。萬幡豐秋津比賣命れ名を補ゐる由は。徵ゐ委く論ゐれど。今更ゐ云ゞ。ゐわ次段の傳よ云ふを見べし。○護齋之鏡三面。子鈴一合は。大倭本紀よ。天皇之始天降來之時共副護齋鏡三面。子鈴一合也。と有ゐる採れるおと。徵ゐ云へるゞ如し。然て其三面れ鏡。まと子鈴一合は何の要ゐゐしと云こと。次段ゐ釋くを見るばし。○副賜ハ。師云。副た皇美麻命よ副ゐゐ賜た授賜ふれゐ。多ゞ崇辞よ附云とた異ゐり。○吾天原とは。即大御神の所治看ゞ。天於日れ御国を詔ゐゐ。○所御た。斯呂志米須とも。伎許斯米須とも訓ゐし。ゐゞ同じおを於ゐ。○齋庭ハ。舊訓よ由邇波を訓るゞ如し。此た大御神れ。大嘗祀おし食ゞと。齋ひ淨免さる庭を云おと。下よ引く壽詞の文れ。齋場ゐ準ゐて知ゐし。○穗た。古語拾遺よ。齋庭之穗是稻種也を云のゆ。此は大御神の。御自ら撰びた

ろし給ひ種おひ。或説に齋庭之穂は。天上なる齋田の稲種おり。彼謂ゆる天狭田長田は神稲に
や。とも云へり。師云。齋庭は種は穂は。唯ふ神を祭賜ふ料はみ
考合せ出し。
に非ず。新嘗は料の稲おひ。上代の新嘗は。神に獻るの。
みふ非ず。自所聞食し。人ふも饗賜ふ中に。みおろら所聞
食ことを主とせひ。今云此事は。第四十二段の傳に委く注せるを見べし。是を以て。
吾天原所御ものの。此御字をもて知ばし。○吾兒とは。今
おは種を依し賜ふ御孫命ハ更おひ。繼體の天皇命は御
裔を。遠くかけて詔ふる御語なり。○當御は。舊訓ふ。麻加
世麻都流と訓るに從ふ。令蒔奉るふて。此葦原中国
ふ持降ゆて。殖著てきおし食む種稲に。依し賜へる由お

ひ。是を前ふも。葦原中国ふ稲を殖と依こと。須佐之男
命は。大須佐田。小須佐田を定給ひし事あひ。後ふ大名牟
遲。少名牟遲神相並ばして。国作給ふ時に。天上をひ稲種
の墮し事ものひて。大地主神の營田は事ものり。是らの事ども。第七十三
段。第九十一段。第九十七段。然まども。其外ふ宜し知種ふ
おどの傳を見て知ばし。
は非ざひけむ故ふ。今かく大御神は。齋庭ふ所聞食に稲
種をば依賜ふ中おひ。諾しおそ。皇大御国の稲は。万国に
比類おく美ふ知事を。外ふ此稲種は事に就ては。云まふ
記せる物ものを此ばに了は洩し。
おひ。
知事ども多くまども。其は別ふ

於是天照大御神。御手。捧持鏡
(コ、ニ アマテラスオホミカミ ミテニサヽゲモチカヾミ)
劒賜而。言壽詔曰。大八嶋豐葦
(ツルギヲタヽヒテ コトホギノリタヽハレク オホヤシマトヨアシ)
原水穗國者。吾子孫。可王出地
(ハラノミヅホノクニハ アガミコノツギクベキキミトナスクニ)
也。皇我宇都御子皇美麻命。就
(ナリスメラワガウヅノミコスメミマノミコトイデヽシレ)
而。御坐此出天津高御座而。爲
(テ ヽマレヽマレコレノアマツタカミクラニテト ニ)

安國平然。天津日嗣出瑞穗。爲
(ヤスクニタヒラケク アマツヒツギノミヅホヲト ニ)
天御膳長御膳出遠御膳。於萬
(アヽツミケノナガミケノトホミケニヨロヅ)
千秋出長五百秋。安然所知食
(チアキノナガイホアキヤスラケクシロシメセ)
於齋庭。此出鏡者。專爲吾御魂
(ニユニハコレノカヾミハモハラレアガミタヽト ニ)
而。如拜吾御前。令坐同殿同牀
(テ ゴトイツクガアガミヽヘヲレメサヒトツミアラカヒトツミユカニ)

而宜齋奉寶祚出隆當與天壤無窮矣詔而復勅天兒屋命亦云常世思兼神天太玉命曰惟爾二柱神亦侍同殿內而取持御前事而爲政焉詔矣故此二柱神者

并祭佐久久斯侶伊須受能宮次天手力男神萬幡豐秋津比賣神者坐佐那縣此者御戸開出神也次登由宇氣神此者坐外宮出度相次一鏡者天照大

御神出御靈名天懸神一鏡者。
天照大御神出前御靈名国懸
神今崇敬木国名草宮而解祭
大神也次一鏡及子鈴者天皇
出御食津神朝夕御食夜護日
護齋祭大神今所坐巻向穴師
社而解祭大神也。
於是ハ右れ種々の物等我依賜ふる事を承とP。○鏡劔
は即上の天璽二種れ神寶ふP。○捧持ハさし上げ持ふ
P。然れども必しも指上げとも貴物を恭ゐく手よ持き
ふ。如此云ふれ常の言れP。○賜而ハ大御神の大御手
とP。皇御麻命れ御手ふ授け賜ふゆ○言壽詔曰れ。即
此の本文ふ採きる大殿祭詞よ。天津璽乃鏡劔乎捧持賜

天言壽。古語云、許止保企言、寿詞、如今寿觴之詞、宣志久。云々とあり。富具てふ言は例れ。万葉十八よ。知等世保久等曽。十九ゐ。千年保伎。保伎吉等餘毛之恵良恵良爾。仕奉乎見之貴左。まと六よ。禱豊御酒爾吾醉爾家里。おゞ猶あり。まと倭姫命世記云、止国保伎白支。まと云々止国保伎給支。あども見えとり。ちて富具とは。もと息吹て。他を祝ふ行の有はをり出て。凡ゐ祝ふ事をし富具と云ひ。言もて祝ぐを言富岐と云へり。百木部、連の所。まと第百三十一段。天、磐笛れ所ゐぎを云へるを見るべし。言夫伎を云ふも同語ゐり。さて言夫伎と云よ。寿、字を用ふことハ。諸越うて他を賀ふを寿と云ゐ。命の長きばのり寿と也事のれきをり轉りて。命長きを寿と云ひ。再轉りてハ。只ゐ命と云べき所よも。寿と云へるこをれ有とり。俗人誤り

て。言夫伎と云ふ語を。伊能知と云ふよ同じあとぞを心得て。人の年數を云よ。ゐとぶき若干ゐあど。哥文よさ子書く人ゐるハ。甚じき非言あり。○吾子孫ゐ。阿賀美古能都々藝々と訓ばし。○可王之地也は。伎彌登坐倍伎久邇那里と訓ばし。前段ゐ引ゐる。御世初の詔詞ゐ。高天原爾事始而。天皇御子之阿禮坐牟彌繼々爾。大八嶋国將知。次止。天坐神之依之奉之隨云々と有はハ。即ゐれ御言を詔へり。○皇我とは。加茂翁云。皇祖神の自から詔ふれり。後の宣命。万葉ゐも。天皇自から如此宣ひしゐと有り。今云。歴朝ゐ詔詞よ。皇朕御世尓當而。ゐど多く見え。万葉六よも。天皇朕宇頭乃御手以云々とをり。○宇都御子とは。高く嚴ゐ。ゐ御子と云ゐをれ。義ハ。既よ云へり。第二十九段の傳見べし。○皇美

麻命も既ふ出あ卍。第六十四段の傳見べし。○就而は。舊訓ふ。伊傳麻斯氐と訓るふ從ふ法し。葦原中國ふ行坐てれり○此之天津高御座とて。前ふ奉坐天都高御座而とてある。御座を指て詔へり。○爲安國ハ。もと安國止と有しを。如此て文成せ卍。其は凡て。此類あふ止てぶ辭を考ふふふ。現御神止。大八嶋國所知食れど有る止は。師說れ如く。爾氐と云むゞ如くれるゞ。其て現御神止坐而ともあり。皇止坐。父止坐ふども。皇ふて坐。父ふて坐と云義あるふて安國止所知食れぎ云ふ止は。安國爲氐ぎ云むゞ如し。是を以て。爲字を當て文成せ卍。下文の爲天御膳云〻と書とる爲も。此ふ準て知べし。○平然て。もと平氣久と有を。それ氣久てふ

辭ふ。然字を當とふふ卍。此て諸越の字書を。く知らむ人ハ疑ふし。○天津日嗣之瑞穗云〻。瑞穗は。前段ふ依賜へる齋庭の稻穗ふ卍。其て師說ふ。天津日嗣。万葉歌ふは。安麻能日繼とも詠め卍。此は天津日大御神の。大御任を受傳へ坐て。其大御業を。嗣〻ふ知看ル由て御稱ふ卍。天武天皇紀ふ。皇祖等之騰極とてある処て。古云日嗣也。と注せられとり。書紀ふハ。漢國ふて。天子と云者の位れう了ふ用ふる字ふ書るをむ。凡てみふアマツヒツギと訓ふ卍。けて此御位ふ嗣給ふ法き儲の皇子ふ。日嗣御子を申し奉卍て。皇太子れ字ふ當とふ卍。斯て右れ意て。必動まふく。誰も然思ひ定ふて有ぬ法き物ふきぎ。別ふ今一の考へ方の卍。嗣て借字給ふふ。天津日大御神の。給寄し賜ふ物

を受納れ知看はす。天津日嗣所知とは申はす。給寄し賜ふ物とハ。即天下の百姓の奉進る。諸の御都岐物なり。是御都岐物即天照日大御神は天皇ふ給寄し賜ふ物なり。御都岐物

歌。平兼盛集は歌ふ。比都岐物とと免ア。然て御都岐物の都岐も。供給の意ア。今の俗言ふ。人ノ物を美都具といひ。まと物を都ゞ久流と云も。本同じ。然て給とは。上と人とり。下ある者ふ賜ふ限れる如く思ふ。次ぎ然ふ非ゞ。下ふア上ア奉るふも云ふ。故朝廷ふ奉進るなも。美都岐とハ云ふ。けて大御神をア。給寄し賜ふ種ゝ物は中ふは稲を主とせり。其由は。高天原ふ所御ア。齋庭の穂を寄し賜へる是ふア。然て康治元年。大嘗會中臣壽詞ふ。天都日嗣乃。天都高御座仁御坐天天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穂遠平介久安介久由庭仁所知食止事依志奉氏天降坐云ゝと有はと。康治は後世ふ

れども。文は古文ふり。台記別記ふ載れり。けて天都御膳遠をある遠は必乃れるなし。遠ふても聞もるゲ如くれまども。然てハ次ノ瑞穂遠をなる遠と重ふり。大殿祭詞ふ。皇御孫之命。此乃天津高御座爾坐氏。天津日嗣乎。万千秋乃長秋爾。大八洲豊葦原瑞穂国乎。安国止平氣久所知食止。言寄奉賜比氏。と有るとを合せ考へて。日給の意を思ふ。万千秋云ゝふ係て云へり。天津日嗣乎。万千秋云ゝと連きとるハ。全は稲は。天照大御神の給寄し賜ふ大八洲国の稲穂を。万千秋ふ所知食と申意ふり。かは中臣寿詞ハ。大嘗ふ初きて申はは故ふ。由庭仁所知食といひ。大殿祭は。天下知看はは。凡ての御上ふて申ふ故ふ。瑞穂国乎所知食と云ゝる。共ノ其指物は同じ稲穂ノて。其中ふ主とし首をはるハ。齋庭は穂ふ主ア。故かの御依しの勅ふハ。主をし首と安る齋庭之穂を詔ひ寄して。其中ふ。天下は百姓の奉貢は稲。まと種ゝの

御調物もみを兼含みとり。前ふも云へる如く。皇御国ハ。稲ふ殊ある滋き所由あゆて。右れ如く大御神の。嚴重ゑ大詔も坐て。後世ふ至ふまゞも。万の政れ有ゞ中ふも。大嘗をはさ無き大事と爲ゑ万ふ物ぞ。然をば。天津日嗣所知食と申せば。即天下知食ゆ御事ふも成れる也ゆ。天津日継とのみ云て。所知食を云れ。まさ日嗣御子ふども神ゆゑ。普く云ふれて。稍後ふ。所知食と云こをを畧々る物ゆ。此事ハ猶疑ハし。但し古事記ふ。此言四処ふ見えとる。それ所知とあゆ。をを解れゑるふ依て。御紀と。中臣寿詞と。大殿祭詞とを并せて。所知食於齋庭。を云はれ文を成せゆ。ふゐ徴ふ云。るを合せ見るべし。ちて天御膳と云をゆ。齋庭まれ文意は。かの稲穂をし蒔生して。其を継ゝふ。

天御膳の長御膳れ遠御膳と爲て。万千秋の長五百秋の。無窮ふ安らけく。大嘗ゆ齋庭ふ知食し給ふと申ゆ。○此之鏡者ゑ。師云許禮能鏡波と訓べし。万葉三ふ。許禮能水嶋二十ふ。許禮乃波流流毋志ゆ。此之鏡以ゆ。志ゑ知の草字を誤れる有む。古言れ一格ふゆ。○專ハ師云。此ゑ全てふ意ゆ。中昔の物語書ふどふも。全くと云べき。此れ此言。輕く見過ゑ処を。毋波良と云ふる例ふゆ。わし。ゆらゆゑ。○爲我御魂とは。師云。出雲国造神賀詞ふ大穴持命乃申給久。皇御孫命乃靜坐牟大倭国止申。天己命和魂乎。八咫鏡爾取託天。をゆる如く。大御神の御神霊を。此御鏡ふ取託て賜はゑふゆ。然れゞ。天照大御神れ御霊

は全此御鏡ふ坐まに物ぞ貴ぬるも可畏きかも此大御
詔とも免粗忽よ勿見過しそ凡て御霊と云よまと用と
の御於ふて申さバ高天原を知看て世を照しあどし賜
ふれ廣く御霊の用あり此御鏡ハ其躰あり さて其御霊
を專此御鏡よ取託て其御躰とし給へむ其用も悉く此
御鏡ふ具て坐り坐て然らむ其用悉く此御鏡よ移り坐て
高天原よ坐に現御身よは御霊ハ貽らじと云ふ凡て
神御霊ハ御霊ハ異ある物よし坐バ悉く此
処ふ在れども彼処ふも少ら減ことあく彼処ハ減ら祐ど
も此処よめ悉く具りて其躰ハ千万処ふ分ぬと云へぞ
め量く ふ何れよも其 ちの古事記よ上ハ八尺勾璁鏡及
用ハ欠るあと無し
草那藝劔ぞ三種を舉あぞら此ハは唯其御鏡の御事を
れみ如此懇ふ詔ふるふて此御鏡ハ中ふも貴く坐あと
著明きもれをや然ふを本よ已三種同等ある物よ説あ
し或ハ玉をしも第一と思ふれるハ彼

水垣朝とり以來の趣よれぬみ ○吾前とは大御神の現
て本をよくも考へざる物あり
御身れ大御前ふ已前のこぞ上ハ出ぬ第九十五段の傳見べし ○如
拜て伊都久我碁登と訓ぢし其は上ふ胸形君等之持伊
都久三前大神也まと伊都伎奉倭之青垣東山上ふど有
ると崇神天皇卷ふ於御諸山拜祭大三輪之大神前ぞあ
ふぞ同言ある故以て知ぢし ○令坐同殿同床云ゝ同殿
同床ハ師の比登都美阿良加比登都美由加と訓れとる
ふ從ふぢし 即皇美麻命と同じ御在所同じ御床よ御坐しめ給ふと詔ふれ已 ○宜齋奉
師云天照大御神ハ常ふ高天原ふ大坐て下ゞ下あ
る諸民まても目れあふ已瞻奉る大御神よ坐ば御孫命

も直ふ此高天原ふ坐ゝ現御身れ御前をこそ此国よて
め拜祭ア給ふばきよ別ふ此御鏡を御靈として祭給ア
ぞ詔ふた如何と云ふ大御神ハ高天原ふ留坐し御孫命
は此国よ降坐て是をア天と国をの往來絶る際よして
遙ふ隔ア給ふ御別をれる故よ今まで吾御前ふ侍坐ふ
親近く拜奉ア給ひし如くふ今をアは此鏡を祭り給ア
と仰め故天津日を直よ祭給ふ御事ハふ妃れア諸人も
此意を思ア今云此師説た今日れのとり瞻奉る天日を
の出とるよ今の説を廢られしと予の三大考辨く天
説辨くふどふ論へるゞ如し偖天日やゞて謂ゆる高天
原よて天照大御神ふを所知看し皇産靈大神まと他天
神とちも往くよ集ひ給ふ御国ふること上よ云ふ如く

ふまむ直よ祭給ふ御事た無とも諸民までも遙よ拜み
奉りて其御靈のぬを辱み奉らむ事た難有まじき事
よこそ然るた今しこそ伊勢大宮へ諸民も參られ古
た諸民の參り拜むとれ禁ぜさせ給ひしゝむ今もし
其古ア れ令を守らむよ諸民は此大御神をふれよ拜み
奉らで在きゝた彼さひおるや蕃国くの人どもさア
よ天日た日くよ必拜みを欠まじき事と思へ○寶祚之
るも多く書ふ其事を記せるも多ゝるをや

隆は阿麻都比都岐能美佐加延と訓るふ從ふばし前よた隆
とゐる訓よ縱ひて隆坐事を文した惡ゝりき○當與天壤無窮矣も舊訓ふ阿
米都知能牟多伎波美那加流倍斯をゐるよ從ふ及し前よ
無窮を師訓よとりて登許志閉と訓し
のど能く思アバ舊訓よ從ふぞ宜しき但し與を牟多を
訓るは舊訓ふ非ず古の言た既よ第百十段ちて是まで
ふ出て其傳ふ注せり

皇美麻命よ詔ふ御命ふアア○復勅天兒屋命示云常世思兼神天

太王命曰。おゝ此二柱神の現身と御靈とを。兼て勅ふ大命あり。其由ハ第百三十三段に徴し。委曲に論へれど。今まと更に云れぬ。○惟れ師の夜余と訓れとは。従ふ法し。此れ他を呼起し辭あり。今俗にも人を呼ときは。夜阿とも夜余とも云ふを有るを思ふべし。○爾二柱神亦云ゝは。大御神。御親の大御靈ぞ。皇美麻命と。同じ御床に坐奉りて。齋祭り給ひ。詔給ひしを承て。爾二柱も。其同殿内に侍ひて。現身は。御孫命れ御前に仕奉り。御靈ハ。吾ゞ。御前れ事を政し給ふと。勅ふる如し。○御前事とは。おゝれ幽は大御神の御靈れ。天下の万事ぞ。御思し處分ひ定賜ふ御政を云ひ。願はゝ皇美麻命れ天下の百姓を恵み治め給ふ。朝廷の御政事を云ふ。前とれ。上にも注せる如く。即神をも貴人を指て申ひ言ふれど。此ハ大御神れ御靈と。御孫命とれ御前を兼て。勅ふりと見むに難ふし。○取持ハ。師云。應神天皇段れ詔ふ。大雀命。執食国之政以白賜万葉十七ふ。乎須久爾能許等登里毛知氐。十八ふ。於保伎見能末伎能末く爾く。等里毛知底。都可布流久爾能[redacted]天皇紀れ詔ふ。右大臣藤原朝臣波内外乃政乎取持天。勤仕奉己止夙夜不懈。おどりの。其事ぞ身に負持て。執行ふを云ふ。今世に。他の事を。傍より助けて共く為るを取持と云も。是くり轉れるあり。源氏物語に。今世の趣ある用ひざまも多か。○爲政ハ。師説に。右に引る應神天皇れ詔ふ。白賜を云るに依て。麻袁志多麻閉と訓べし。其言の例れ。彼段に

云ばし。前よりマツリゴチテヨを訓ばく思ひしりど。を
く思ひば。上よ前事とある即政おきむ。然訓ては
同言の重ある別り。為政を書るむ。只義
を以て別り。此字ふ拘むるばこのらぞ。
と云言れ義ハ。神武天皇段ふ。委く云ふばし。と有ア。如此
有ば。天皇の御政を。關白大臣別どの取申賜ふ如くよ。此
二柱神む。天照大御神れ御霊の御政をも。取行ひ賜ヲを
あア。故その御霊を大御神れ御霊の
御鏡よ附添て降し賜へるあり。○故此二柱神者。此
二柱とは。天兒屋命と。天太玉命と別ア。此を師説よ。大御
鏡を。思金神の御霊宮を指て申せりと云れ神れ御霊宮の御
しハ非言あり。委くハ徴よ論ヲるを見るべし。故む。此二
柱神を。大御神よ幷祭おをむ。上れ勅ふを依事あるる故よ
云ア。○佐久く斯侶ハ。師云裂釧あア。大神宮儀式ふ。佐古

久志侶とも。佐古久志留とも有ア。神功皇后紀ヲハ。拆
は。仁德天皇段ふ。玉釧見え。繼體天皇紀ふ。矢自矩矢盧。繁釧
鈴五十鈴宮とあり。釧
あり鈴をおゞく云ふ。
著とるを云ふ。
久志呂よ有あむ左手れ。吾ゞ奥手よ纏て去ましをはと
同巻ふ。玉釧。まと宍串呂別ど見えて。此物のおと。師れ冠
辭考よ。詳ふ說れ多ア。ちくしろ。ちゞくしろ。くを抑此
ろおく。おどの條くを見べし。
物。後ゝれ絶よとまむ。今京別ぎよ至ては。其名をゐふ人
知ざアけるふや。和名抄ふも。釧字をむ舉あのら。比知万
岐をおほして。久斯呂をふ名をば出ちぞ。農耕具中よ。鍬。漢語抄云。加奈
加伎。一名、久之路。とあるむ。若くは字形の似とる故ふ。釧
字の訓を誤りて。此字よは。附とるゝ。まと思ふよ。此鍬字。

分裂也と云注も有れど五十鈴の枕詞は佐久〻志呂は是よりて臂よまく釧よハ非ざるよやとも思ひしかども猶然ラは非ず はと彼万葉九ゐ巻久志呂爾有奈武と云歌をめ六帖ゐ櫛の歌とゐと已顕昭袖中抄ラ此を辨へてくしろは在ラ指上名環在臂上名釧と云りと云るハさにかゝまばゐ古書等よりゐ釧字をも寫誤已て或は釵或は釵ゐゞ〻作ゐ或万葉ゐ釵とかき古事記下巻ゐ釵と作り是らの誤字ゐるを以て思ヲバ彼書紀の拆鈴は鈴も釧は誤字とゐそ思はるゝ近き世ゐ別りて契冲荷田大人吾師ゐど繼ゐ別ゐ釧の事は明らゐ已ぬるを此佐久〻斯呂は已ゐ今少し詳ゐらゞ其故は拆鈴と云と裂とる故ゐ拆鈴と云と云る如く拆鈴と云むはとも無れど其裂とる鈴を著とらむとらゐ釧をしも直ゐ佐久釧をハいのでゐ云む此

事冠辞考よもいぶゐ已て釧と鈴を一ゐ云るゐや有む釧ラハ鈴をゐくる物ゐし有まバ其鈴の形ゐとりて拆くしろ五十鈴と連けとるゐや云れとりゐゐ心ゐ故熟思ふゐはゐ古の鈴ゐは種〻の形様ゐ已ゐと思しけまば釧の鈴も一種ゐりて他は異ゐりけむ今もゐる駅路は鈴其外ゐも尋遺れるを見ても種ゐ種有〻むことゐ知べし常のと形は甚く異ゐる古物の緒ゐ貫て臂ゐ纏くを云る名ゐゐ其鈴を除て別ゐ體は無き物と聞えて履中天皇紀ゐも〻〻ゐ手鈴と云已も鈴の外ゐ躰あらバ必〻鈴とは云はじ異国の釧を云物ゐは其さま異ゐるゐしまゐ王釧ともゐるは王を著とるも有しゐるゐし然れど釧の鈴一種あ已て釧即鈴ゐるゞ故ゐ裂釧ゐは云ゐるゐし ちて然手ゐ鈴をまゐしハ觀は已ゐの鈴ゐハゐらで鳴音を取

ふるばし。万葉よ。手玉鳴らあど有るを思ふべし。故、釧ハ。著明れる処うれ故けど。袖ゥ隠れとは臂よまくあり。また允恭天皇、段ふ。足結の小鈴とも云れど。足よも著しあり。○伊須受能宮ハ。師言よ。これ伊勢、大御神の宮ふ卍。神功皇后、紀よ。五十鈴と書れと卍。此れ地、名よて。五十鈴川。五十鈴、原ふども云へり。名けふる由は詳ふらぬと言まと卍。然まど其分注よ。倭姫、命、世記ゥ。太田、命の言として載と鋒。大御神れ。天上より美宮処と見定め坐て。天之太刀。逆金、鈴を。投降し給ひし処ふりを白せる事を記して。中よ疑ハあき事ども有て。全ハ信られぬと。云れしこと。ども。心ゥうれ。此、説を用ひられとる様よ見えと卍。故今考ふはよ。篤と卍出さる名ふるばし。然思ふ由は。古事記よ。神武天皇れ大后の御名を。伊須ゝ岐比賣、命と申れ。其、御母の廟よ入坐ふ時よ。神矢ふ富登を突れて。驚き立走

卍。伊須ゝ岐し故よ。貢坐る御名ふる由見えとふよ。此、名を日本紀ふは。五十鈴姫、命とふの卍。然れど伊須受。伊須ゝ岐同語と聞も。日本紀よ。神、名人、名地、名ふどよ。伊と云をむ。凡て五十と借字よ書まとる事ハ。誰も知れるグ如し。然ふよ大殿祭、詞ふ。取葺計魯草乃、噪伎無久。古語云、蘓蘓岐。御床都比能佐夜伎。夜女乃伊須ゝ伎。伊豆都志伎事無久。を云文ふ卍。夜女の女ハ目ふり。祝詞考よ夜女れ童を云と云れしれ非ふり。彼此合せて思ふむ。伊須受とは。噪しきを云言と聞もれぞも。此、大宮處ハしも。浪音不聞国。風音不聞国。弓矢鞆音不聞国。と儀式よ見えて。最も静りき處ふるよ。かく云ふれ。大御神の鎮座ざふ以前は。篤薄ふどれ原ふりれむ故の名

を聞え給ゆ。其は倭姫命世記に。此原に宮敷坐る時に事を。詔物部八十友諸人等五十鈴原乃荒草木根苅掃比。大石小石造平氏云々。と有を。此事々の宝基本記と云物にも見えたり。此に妄書なれ共。此らの説に。然しも妄説は無るべし。けて大殿祭詞に。

伊須々岐鳴を。貢給ふ名を聞も。

成云。芋草盛也と有て。何もスキと見え。日本紀私記云。草聚生曰薄。辨色立了。薄尓雅云。薄スキと訓とり。字書に。草稠曰薄を云。赤染衛門集に。

犯でしこの宮〳〵犯りあり。

あでしこれ花にき。まゝ弘ぢ人も。きて見ふをし。万葉七に。〔妹〕の巳と我のよひ路の細竹為酢寸。我しかよはば。おびけ細竹原。こまらを合せ考ふるに。何草にまれ。小竹ふ乃れ。宮〳〵とおもり叢りとは物をスキと云。

る。れ。ス、は。俗にスイ〳〵と生ありと云る義。キに例

のおもる意にて。スキと云ふるべし。まとスキと云る一種の草も有る。此もおもりに。長高く生る物也。ふに云ふる。孝徳天皇紀に。芦字をスキと訓とし。巳思合宮。まとソ、ギ。ス、ギは同言なる。第九五段に。はと鈴を須々と云も。上に云ふ如く佐々夜々を云ゆ。

鳴に巳貢る名れまば。篠を同言れ巳。是にとりて又按ふ鈴鹿山ハ篠所山

ふるぢく。鈴森ハ篠森ふるぢし。篠もサヤサヤれ巳。けて然る篠れ原に建とる宮ふ。故に。伊須受能宮を申し。其原に流ふ〳〵河ある故ふ。

五十鈴川とは云ふ巳けゆ。此宮処のことに。猶垂仁天皇巻に委く云べし。けて佐久々志呂。伊須受と。ぐく故に。師説の如く。釧は繁釧とも云如く此ゞ鈴に。繁く貫を以て。數々れ鈴といふ意にや有に。まと伊勢の書等に。宇治と云にも。ぐけ云るハ。伊須受より轉れる。後の事と聞えとり。

○幷祭ハ後ふ垂仁天皇れ御世ふ大御神を伊須受能宮ふ鎮坐しめ奉ひ給ひし時ふ二柱神の御靈實をも此時の勅れまゝ其相殿ふ幷祭れる由ふ。幷ハ本ふ拜とゐまゝ誤ふる由れ徵ふ既ふ倭姫命世記ふ天照大御神一座御形八咫云るを見ゐべし。鏡坐相殿二座左天兒屋根命右太玉命とあゐれ此の傳へ符ひて古說ふ。御鎮座傳記ふも相殿神二座左天兒屋命靈右天太玉命靈とゐり。まゝ二十二社注式ふも或書の說れりとてかく云ふ。○次天手力男神萬幡豐秋津比賣神是まと此時ふ副て降し給ふる御靈ふ。○佐那縣ハ師云佐那縣と訓ゐし那の韻ふ阿を含めまむ賀多郎阿賀多ふり然らでも阿を省くハ常ふ凡て年魚市ゞと松浦がとふどれ類乃賀多も皆縣れ。是らを後世れ混まとる非ことふ。書紀の狹田毘古神段ふ伊勢之狹長田とゐる此地の事ふ。此ふ伊勢と云ぢるれ伊須受宮まと外宮れ續れまむふ。さて書紀ふ狹長田と書れとるは借字ふり。然るを狹田長田の義ふ云る說ふどハ非れ。ちて此御社は神名式ふ伊勢國多氣郡佐那神社二座是ふゆ大神宮式ふ凡大神宮年限滿應修造者遣使孟冬始作之神宮七院社十二處云〻と云る十二社れ中の一ふて二十年に一度造改らゐ〻社ふ。或說ふ二座を手力男神と若佐那賣神とあり云り若沙那賣神ハ上ふ出さり此神の此社ふ坐こを由緣ゐるふや。まゝ地名ふ因て後人れ推當ふ定詳ふらゞ。ちて此御社れ今多氣郡佐那の仁田村と云ふ在て大森社を申ゞ。村の西方ふ在。佐那れ今佐那谷を。一谷

れ大名(オホナ)よて。八村ある處ふれむ有る。按ふ。佐那縣の佐那猿田毘古、大神れ坐しよ巳地、名ふ負、ふよハ非ざる。但し前ふこの神れ御言ふ。伊勢、狭長田。伊須受の川上ふ到らむと詔給へるふ依れず。佐那縣ム元よりれ名と聞もれバ。前後違ふるが如くあまども。後の名を。始へ廻らして語り傳ふるも。常の事れれむふり。然れど佐那縣ム。即ち此、神れ御縣れるべし。○此者御戸開之神也(カミナリ)は。即(ナ)上、件佐那、神社二座を云ふ。那を奈と作とる本ども有り。其ム倭姫命、世記ふ御戸開、神二座。天手力男、神。拷幡千々姫、命。と有ふて知ばし。度會延經ガ神名式考證ふ。佐奈、神社二座の下ふ。今在佐那、仁田村、西称大森、社。為大神、御戸開、神。と云るを思合ふべし。ちて天手力男、神ハ。大御神の幽居(コモリヰ)らせる。石窟れ戸を開給ふれむ。御戸開之神と申さむは。然(サル)ふ。ぞれまぞ。拷幡千々姫、命。亦、名、萬幡豊秋津比賣、命。を。手力男、神と

竝ばて。御戸開之神と稱(ヅラ)せはふと。甚(イタ)く心得ガとし。石屋戸、段の事狀(アリサマ)を思ふば。手力男、神。亦、名、天、石戸別、命。を共ふ。御戸開之神と稱(ヅラ)ばきハ。必(ス)天、宇受賣、命。亦、名、大宮能賣、命。ふるべき物ふ卍。抑(ク)ゝの御戸開の時ふ。御名の出とる諸神とち。各(ク)某くふ功有しことを。申ばも更ふる中ふ。天、宇受賣、命の功れしも。殊ふ卓とり。然るハ此、神のいと歡(カン)く笑(ワラ)く物し給へる俳優(ワザヲギ)ふ。八百万、神れ。感動へゆ笑し故ふ。大御神ハ怪みまし。其、俳優ふ御心感き給ふる故ふ。兒屋、命の廣き厚き称辞も。御耳ふ入りて。石戸を細目ゆ開と乃ひ。石戸を細目ふ開給へば。故ふ。かれ御鏡ゆ大御形の映(ウツ)れる。弥怪しと思(オモ)して。稍戸をゆ。御出しゆば。手力男、神れ。引出し奉る。ふをを得給へり。然れバ此時の俳優。さを。も歡(カン)く可(カ)笑(ワラ)ざらましゆむ。天、思兼、神れ。八意ふ思慮(オモヒカ)りて。處分(カ)ひ定(サ)め給へる事ども。悉(イタヅラ)徒事とぞ。ある。ば。ゆ如(カ)此思ひ続くれむ。御戸開れ事の成(ナ)れるハ。天、宇受賣、命の俳優ふ事成(リ)始(ハ)め。天、手力男、神れ手力(タヂカラ)ふ事成(リ)竟(ハ)てぞ。有ゆる。斯て第五十七段の傳ふ。委く云る如く。大御

神を新宮に移し坐奉りて後も、宇受賣命その大御前に侍ひて、大御心を取申しあつかひ、参入罷出る神れ擇び、言直し和して、宮勤みに勤ましめ、手力男神れ、其御門を護りて、四方四隅より踈び荒び來む物を、待防ぎ掃ひ却け給ふれば、此二神を、御戸開之神と申さむことハ、必ずあらぬ有べき事にあらぬぞや。然れども御戸開神れ一座を、拷幡千々姫命と云ふを、古書の諸説うち符て、誤れる傳へとしも聞えぬるは、最も異なく心得がたし。故考ふるに、拷幡千々姫命を申れ、疑れれ大宮能賣神。（天宇受賣命、）を同神ふるが、拷幡千々姫と申れるぞ。凡て織物に著ふる名どもは、此神始め、御衣を織ませる故に負坐る御名。（第四十八段に名の出とる天八千々比賣命、また天棚機比賣命と申も、此神ふることなり。既に云ふが如し。）天宇受賣と申れる名は、古語拾遺に、其神強悍猛固

云く、を云ふ神性を負坐る御名。（委くハ、第百三十六段の傳に云を見るべし。）大宮能賣と申れる名れ、かの大宮に侍ひ、謂ゆる善言美詞を以て、大御心を和し奉きる謂に因りて、負坐る御名ふるを、如此數神に誤れ來れるを、他神名ちふも此例多かる事は、上にも下に必論ずるが如し。（但し宇受賣命と、豊秋津比賣命を同神と為て、忍穂耳命の后神にて、迩々藝命の御母と云、説ありと思ふも有ざるれど、実れ忍穂耳命の后れ、豊秋津比賣命に坐こと、第三十七段に見えたる如くあれど、豊秋津比賣命ハ、忍穂耳命に、御外姑に坐し、迩々藝命にハ、御外祖母に坐ること、故に妨ぐ、但しかく言るむ人は、あれ心ゆ思ふも有べけれど、心を平にして、上にも下にも云る説ども、熟く考へ通しさらむ後れ、其疑ひの晴くべきもぞ。）けて伊須受宮れ相殿神ハ、上に注せる如

く。天兒屋命。亦名思兼神。天太玉命ありしを。雄略天皇の御世に豐宇氣大神を。今れ外宮に遷奉られし時に。大御神れ御託まして。天兒屋命。天太玉命を。外宮れ相殿に坐し。皇孫命に陪奉し。かの御戸開神二座ぞ。伊須受宮れ相殿と爲給ふ。此事國史官牒の類に記し洩せるを。憾くも伊勢御鎮座本記に。其傳を載とり。其文は。第百三十三段の徵。まと雄畧天皇卷。外宮鎮座の所に引て委く說くを見べし。是を以て。延曆れ內宮儀式に。天照坐皇大神宮。所稱天照意保比流賣命。同殿坐神二柱。坐左方稱天手力男神也。雷御形弓坐右方稱万幡豐秋津姬命也。雷御形劔坐。をなり。此れ雄略天皇れ御世と。後の趣を記せるれ。然るを師は。古事記に常世思金神を。伊須受能宮に祭るとある說に依て。天兒屋命。太玉命を相殿と云說をも。天手力男神。豐秋津姬命といふ說をも。誤りと定られしは。兒屋命。思兼神の同神ある事と。右の由緣をを辨ふ得らまざれし故あり。委くは徵に論へるを見べし。

然れど神名式に。佐那神社二座とある御社れ。內宮れ相殿に遷奉れる。御戸開神二座れ本社にぞ有ける。抑かの石屋戸段に。天思兼神。亦名兒屋命と。布刀玉命と。招事れ長として仕奉れ。大御神を新宮に移し奉りて後れ。石戸開れ事に。もむら勞き坐る天石門別命。亦名手力男神と。大宮賣神。亦名天宇受賣命と。御前に侍ひ。御門を守りて仕奉れるぞ。此御天降の時に。其四柱の現身と。御雲とを副給ひ勅して。天兒屋命。太玉命に。御前れ事を政しめ給へるぞ。まと後に御託まして。兒屋命。太玉命を外宮の相殿に坐し。皇美麻命に陪給ひて。御親れ相殿ぞは。御戸開之神二柱を。祭らし給ふる事。案を思ふに。悉く幽契ある事なるべし。

しかて神名式に。阿波國名方郡に。天石門別八倉比賣神社。大月次新嘗れ御社なり。仁明天皇紀に。承和八年八月。奉授阿波國正八位上天石門和氣八倉比咩神從五位下。清和天

皇紀ヨ貞観七年二月正五位下天石門別八倉比咩神ニ従四位下同十三年二月従四位上同十六年三月正四位下陽成天皇紀ヨ元慶三年六月正四位上ヲ見ル寛勘文ヨ天慶三年二月為正三位トモ有ル社ヲリ此ハ決免テ右ハ佐那神社ヲ坐ス二座の中外る比賣神を移ス

ヒ齋ヘル社ヲ也右の社號を多くヨ見てハ天石門別神と八倉比賣神と二神ヲテ佐那神社ヨ然ヲ移せりを聞え其ヨ准テ佐那神社ニ座ハ此二神ヲるべしと思ハれど此ハ一神ヨテ天石門別八倉比賣神と申ス御名ヲり其ハ神名帳ハもと国々の司ヲどれ向くヨ記せる物ヲる故ヲ国ごとヲ其躰裁ハ別ヲるヲ阿波国の帳ハ例として二神ヲるハ必二座と記して譬へ天村雲神伊自波夜比賣神社二座倭大国玉神大国敷神社二座ヲ記せり然るヨ右の社ヲハ二座と云ハ別字の下ヨ神字ヲれハ一神ヲること著明ヲ其は此社ヲ竝びテ同郡ヲ天石門別豊玉比賣神社を申ス社もヲの也斯て此名方郡ハ和名抄ヨ名方西郡名方東郡と二郡ヲ別ち載ヲ有ヲ国人ヲ尋ぬれバ今は名東郡名西郡と字音ヨ呼ぶ由ヨテ八倉比賣神社豊玉比賣神社をもヨ名東郡ハ名る佐那河内村と云ヨ在テ天磐戸別神と稱ふと云也然れど名方を云ふ郡名ハ伊勢の佐那縣ヨ坐ス御戸開神の一座を移して二社ヲ齋ヲるヲ本居ハ〻地名をも移せるヨテ舊ハ佐名方と號也ヲを後ヨ佐を省ハテ名方と爲ヲ有ヲを著明ヲり此ハ諸国郡郷の名を二字ヨ約ス也テ好字ヲ用ヒられし故の事ヲるべし是ヲもて和名抄ヲ名方奈加多と書ヲる猶諸国ヨ地名の此ヲうヲり彼ヨ移れる類ハ計ふるヨ暇ヲらバ也まと是ヲ因りて思ヲ

ば佐那神社ヲ坐ス拷幡千〻比賣命ハ示名を八倉比賣

命とも。豐玉比賣命とも申ひおを炳焉し。然るに八倉比賣を申ひ名の趣。まと大宮能賣神。示名、天宇受賣命。れ功績ふ由ゐの卍。其れ八倉とハ。石倉の義にて。石倉やゐて石窟おを。ば。彼石屋戸を開ける功を稱へ。かくも名付ばき物ゑ卍。然思ふ由ハ。伊豆国加茂郡に伊波久良和気命神社と云ゲ在て。天石戸別命の別名と聞ゆること。第五十七段の傳に說とる如くおをバふり。猶那賀郡ふ石倉命神社と云ふも見えと卍。示若くは。石座れ義にても有むり。倉も座ゑ本ハ同言れを。用ふ意ハ少この異ふ卍。座と爲とらむも。大御神の隱坐る。石座の戸を開ける有功を。美ける意ハ於ゑじ。諸国に石座。まと石鞍ゑど書る神社れ多りる中に。参河国宝飫郡に石座神社ゐり。今大宮村と云に在て。所の鎮守ゑりと云ハ。大宮能賣命と申ひ御名ふ因

ふきに れ非げるり。ちて豐玉比賣命と申ひ名れ。第百五十四段ふ。大海神の御女に。同名れ神も有て。異ふる義ふき美稱れ卍。然るに此天石門別豐玉比賣神社の同郡に和多都美豐玉比賣神社と云もゐり。是もし因ある事も有むりを考ふるて。此れ適に同名れ神の同郡ふ鎮坐るりて。固とり由緒ある事ふハ非ゑ。但し天石門別豐玉比賣命。示名、萬幡豐秋津比賣命の御女に。玉依毘賣命と申ひ有て。忍穗耳命の大后とふり坐し。和多都美豐玉比賣命の御弟に。玉依毘賣命を申ひが在りて。日子穗々出見命れ大后とふり給へるれ。是も偶の事にれ有れど。信に奇しき事ふ卍かし。はと是ふ因て思ふに。山城国葛野郡ふ。天津石門別稚姫神社。名神大月次新嘗を載られと る御社も。決ゑて萬幡豐秋津比賣命示名、大宮能賣命示名、天宇受賣命亦名、天石門別八倉比賣命示名、天石門別豐玉比賣命れ。別御名ふるばし。此御社の事を。清和天皇紀貞觀元年五月れ処に。天照御門神と見え。

同七年六月の処ろは。山城、国従五位上。天津石門別稚姫、神列に於官社とも見えたり。此社のあと。猶委くハ第四十六段の傳に注せるを見べし。彼此思ひ合せて。此、比賣神ふ。御名の多如ども。其を戎辨ふ法し。然れバ彼、五伴緒、神の処に。天宇受賣、命と云るも。其、現身を申し。二種れ御宝と共に副賜ふ処に。豊秋津比賣、神と云るも。其御霊を降し賜ふ物と知べし。○次登由宇氣神。師云。由、字は用を寫誤れるにや有む。此、御名も。古書ども。豊宇気とも。登由気とも云へる。由も用宇の切ると云へる。例は見えず。故、由を姑くヨと讀べきなり。されバ登由宇気と此、段も。五伴緒、神も。はと常世思金、神ふぞも。皆上ふ其、事を舉て。然て此、二柱、神者。と云を。下は。各其、神とち れ注れ。然るに此、豊宇氣、神のみハ。上に御名を舉ずして。此ふかく出とるは。上れ思金、神ふどの名戎連舉ある處ろ。

此、神の御名も有しが。後に脱とるふや有む。此、大神の甚も思ふ。其御名を挙とらむ次序は。思金、神の上に有べき事ふり。其は如何まれ。此、よかく舉とれむ。此、大神の御霊なも。此時に共に天降し奉り賜ふふ。然るは此、豊宇氣、大神も。高天、原ふして。天照大御神の。常に拜祭賜ふ御食津神に坐ず故に。己命れ御霊鏡に屬添て。此、御霊をも降し奉り賜ふふりけり。今云、天照大御神の。高天、原にして。豊宇気、大神を拜祭り賜ふこと。既に第四十三段の傳に云へるを見べし。ちて書紀れ此、段に。此、神を降し奉賜ふ事れ見えざふも。現御身に非ず。御霊實ふるゞ故ふり。○外宮ハ。師云。加茂翁の祝詞考に。万葉集れふ登都美夜の例を引て。其は常れ大宮れ

外に別に建置れて行幸ありる宮なり云ふまじ。即天皇の宮にして別に主有ることなし。然れど此伊勢の外宮も五十鈴宮の外宮ふ云ふ。多〻天照大御神の宮なりと言れるは昔を比ふ比考へに云て信ふ然ことなれり。然まじ。元來有し。天照大御神の外宮に豐受大神をば鎮祭れるなり。今云外宮と申に称れ義は信に然るべし。然まど此地に元來大御神の外宮ありしと云ことは物に所見ることなし。然れど雄略天皇の御世に大御神の御託まを丹波国より迎へ奉り給ひし時ふ今宮を大御神の外宮に准へて造まるに豐受大神を鎮坐し給へる故ふ後までも其意ぞ遺りて外宮と称へ來れるなり。

万葉六ふ幸紀伊国時の歌に和期大王之常宮等仕奉左日鹿野由十三に久經流三諸之山磯津宮地二十に東常宮ぞれら彼天皇の外宮の例なり。中に東常宮ぞ続紀に東院と有れば外宮と明らけし。ぢて外宮は元を内に對ふ意の名にはあまぎも内宮外宮と對云ふぞ後の事にこそ有れ。古に五十鈴宮を内宮を申に云ぞは無ゆ。延喜式にふも二宮共並ぶ舉とる處にも五十鈴宮をば大神宮ぞれみ云ふ。天皇の御も外宮をば外宮と云ふども常の大宮を。内宮と云ふとは無れば此も然有べき事なり。三代実録五の印本に内宮と有るは古本に同宮とあり其処の文意を考ふるに同宮なるべきこを決し内字は誤りあり。ぢて豐受宮を外宮と云ふぞも古書ふは此に外に見えぬ式外どにも度會宮はと豐受宮などれみ有。其は本

は大神宮れ外宮あまども。豊宇氣大神の鎮坐てよりは。其神の宮あるゞ故れるばし。古事記よは。本をれ名を舉て此神其宮ゑ坐と云るあり。然るを師の考ゑ。内宮ゑハ。其荒御竈を齋奉りて。豊受神ハ其相殿ゑ奉り。外宮ゑハ。其荒御竈を齋奉りて。豊受神ハ其相殿ゑ坐神あり。と云れとるハ。甚謾あり。まゝ豊受神を相殿ゑ坐と云こを。更ゑ拠あし。続紀の神護景雲元年の詔ゑも。等由気宮とこそ見えとれ。其をもとゝく云ひ曲られとれども。相殿神の御名を以て。其宮を呼ばき由あし。ホ為内宮ハ。大御神れ和御竈。外宮ハ其荒御竈と云ことも。更ゑ依所あし。凡て師の和竈荒竈と云れとるゑハ。當ら然説多し。此事は神功皇后段ゑ。委曲ゑ辨ず云べし。

ゑ伊勢れ神名祕書と云書ゑ。村上天皇御宇。祭主公節之時。皇大神者。奥座之故號内宮。度會宮者。外座之故申外宮。始出自此時也。と云。此説信ゑ然るべし。是ゑ依れば。

内宮外宮と申ゑをは。此御時をゆゑ始ゆ。延喜式あゞまでハ。此稱見えとるゑと無ゑ。西宮記あどゑ至りて。始めて二宮を。大神宮。外宮とも。内宮。外宮とも舉らきと。日本紀略長保四年れ處ゑ。伊勢外宮云くとも見え。ゆ。また百錬抄。後朱雀天皇長久元年れ処ゑ。外宮の御事を。大神宮外宮と云。ることゝあり。此ハ古の意ゑハ。叶ずれども。其頃の文ゑは疑れし。若は写誤。數本を考ふばし。但し大神宮とれ。二宮を合せて申を意ゑて。伊勢れ外宮の謂ゑ。ちて村上天皇れ御世をゆ。内宮外宮と申ても有べし。

ゆゑとは。外宮と云稱の。古ゑゆ有しゑ就て。新ゑ内宮を云稱をも始めて。相對ずて云あり。然れば外宮と云稱も。此時をゆ。正しく内ゑ相對とあゑて。古れ意をハ

少ゝ變れ已。はと内宮と云は。奥ゝ坐よしまて。唯外宮ゝ對言はみあり。然るゝ是を。却て外宮と云称より。古きこと
あど有まど非あり。内と宇治とハ。知れ音清濁異
ゝして。通はし云るこゝあし。混ふべきゝ非ゝ。○度相
は。師云和名抄ゝ。伊勢國郡名ゝ。度會和多良比とあるゝ是
れ已。然て五十鈴宮れ御事を。垂仁天皇紀ゝ。渡遇宮をい
ひ。神功皇后紀ゝも。百傳度逢縣之。とあれど。度相と上代
をゝ廣き名と聞えと已。万葉人麻呂れ長哥ゝ。渡會の斎宮とを。
はゝ。二宮ゝ兼とるゝ。然るゝ此ゝ。五十鈴宮に對て。外宮ゝ
かく云はを思ふゝ。れゝ其初は。外宮れ邊の地名ゝこそ
有ゝ。ら。故二宮を並ゝ言と。ゝ。稍後までも。外宮を

外宮度會宮とハ云已けゝ。類聚國史大同三年の勅ゝ伊勢大神并度會二宮云ゝと見
え。延喜式ゝ。常ゝかく様ゝ云り。名意れ。伊勢風土記ゝ。神武天皇天日
別命ゝ詔して。國を覓ぎむる時ゝ。國神天日別命を迎ふ
はゝ。橋を造已堪ぎて。梓弓を橋と爲て度せるゝ。其資者
彌豆佐ゝ良比賣命。土橋鄉岡本村ゝ迎相て。度會る故ゝ
名くと云已。土橋鄉ハ。和名抄ゝ。度會郡継橋鄉云るゝ是ゝ
り。岡本村れ。今も山田の坊名ゝ呼ふ処れ已。
是を以て見るゝも。本は外宮の云ゝ已れ地名ゝ已しゝ
ゝ著し。今云伊勢風土記れ全文れ。神武天皇卷の本文と
名文ゝ抄しつゝ。為れバ。師れ本文のまゝゝ引まとれど。今ハ仮
卷ゝ委く云を見ゝ。彼ゝ
はきに。反ちゝ万ゝ。外宮之度相と云ゝ已。聞ゝ。ゝ。心ちゝ

ゑれど。甚雅とる古語ゑ格あゆけ已。凡て古事記ハ。文よさかしらあき故ふ。かゝるさまれ語の遺れるゲ感と充あり。但し外宮よ坐度相神とも訓まるまど。度相神と申ゑことゑれし。然ゑ宮は大御神ゑ外宮ふゆ。地ゑ度相ふる。其二ッを竝ぶて連言とて。間ふ之てふ辭を置ゑよて。龍田風神祭祝詞ふ。吾宮者。朝日乃日向處。夕日乃日隱處乃。龍田能立野爾小野爾云〻。古の日隱處乃竜田。とゐる乃よ同じ。まと立野小野尓と。尓の重ふりとる。同じ心ゑ孑ふり。まと諸祝詞よ。八束穂能伊加志穂。まと安幣帛乃足幣帛。ゑれゑ云類ひ。まと萬葉十三よ。走出之宜山之。出立之妙山敘。山之ゑれ之ふり。此類ひふゆ多し。乃ど云孑ると同格ふ已。上の登由宇気神と云よ

り此處まで。皆師説ふり。余ゲ説ハ今云とことわきることと例の如し。○此豐宇氣大神も。此時天照大御神の御靈ゑ神鏡よ副て。御孫命ふ授け降ゑ賜孑る隨ふ。崇神天皇の御世まで。大御神の御靈よ副て。禁中よ御座しを。是まと大御神を移し奉已賜ふ時ふ。共ふ禁中を出ゑ奉已。其宮處を覓賜ふと。諸國を巡已賜ひし時よ。丹波國よ鎮坐けるゑ。雄略天皇の御世ふ。天照大御神御神御託まして。今の外宮ゑ所よは遷奉り。給ひしふ已。此事ふゆ崇神天皇。卷。まと雄畧天皇。卷よ。委く注ふを見べし。延暦ゑ儀式ふ。等由氣大神宮。今称度會宮。在度會郡沼木郷山田原村。神名帳ふ。伊勢國度會郡。度會宮四座。相殿坐神三座。並大月次新嘗。倭姫命世記よ。豐受大神一座。相殿神

三座。大一座。天津彦〻火瓊〻杵等。形鏡坐。前二座。天兒屋命。形笏坐。太王命形宝王坐。大左方坐。前二座。右方坐。

とゐる。師云。神名式ハ。相殿神三座並大。とゐるを。此世記ハ大一座と云るも。餘二座も。や〻後ハ大ハあ

し奉り賜ふるゆゑ。又ハ本をり並大あゐら。其中ゐも等

卑き差ゐる故ハ。分て大と云ひ。前と云へるハや。前の事は

上ハ委く云ゐ。此相殿ハ。皇美麻邇ニ藝命れ御坐ゐと云ふ。他

れ古書ハ所見ぬきハ。唯おれ世記ハ依てぞ。然る事とは

知られ為る。是まと此記の大れる賜物ハこそ有けき。然る

む延暦の儀式ハ。座數をさ子ハ記さゐ。神名式ハ四

座とあれど。神名を云ざきバ世記の傳子無りせば。何ハ

と卍てゐ。相殿三座の御名を知らむ。殊ハ迩ニ藝命は。式

ハも其御社と覚ゐきハ見え給ゐば。是まと世記ゐゐ卍

せば。其御霊を祭れる所を知り奉るべき由

ゐし。此れ等閑ハ思ふべき事ハ非ばゐし。けて同じ相

殿と申ゐ中ハも。兒屋命。太王命は。皇御孫命ハ倍奉卍給

子るゐ卍。其は大御神の御託ハ因れゐこを。上ハ說とる

ゐ如し。ゐゐ委くハ。雄畧天皇。巻ハ云を見るべし。○次一鏡者云〻。是を卍下

文は。前段ハ採れる大倭本紀ハ。共副護齋之鏡三面。子鈴

一合也。とゐる本注ハ。一鏡者。天照大神之御霊。名天懸神。

一鏡者。天照大神之前御霊。名国懸神。今紀伊国名草宮崇

敬解祭大神也。一鏡及子鈴者天皇御食津神。朝夕御食夜

護日護齋奉大神。今巻向穴師社所坐解祭大神也。とゐる

を。其隨ハ採て。少〻文を成とゐゐ卍。前ハハ此文義を思

及子鈴とある一鏡を。古事記と合せを。此れ正ハ豊宇気

神の御霊躰を云へりと思ひ。巻向穴師社とあるハ。巻向

社と穴師社と二社を云ひ。一鏡及子鈴を合せて。御食津

神を申して。二社ハ解ち齋子る事ハ心ゐゐ。其非意を

もて成文を記し。徵よも論へアしりど。後よ熟思へバ。其説は謬ゆある故よ。今かく本書のまゝゐ文を成せア。

○天照大御神之御靈云くは。かれ八咫鏡に坐ゲうアゐ。此二鏡も。はと其御靈ある由ゆアア。但し上りは唯よ御靈と云るハ。上よも必前御靈と有りむが。写し脱せる物をぞ思ひるゝ。其れ下よ云ゑ見て知べし。天懸ハ。阿米加〻須。国懸ハ。久邇加〻須と訓ばし。其は天武天皇紀。延喜式ゐどよ。国懸をゑゝ訓み。今集解よ。国懸須とも有れバ外アア。然て此国懸の訓よ依アて。天懸を。右のおを訓ばき義も所知とア。まよ日本紀ゐ。クニノカ、スとも。其れ非訓ゐり。今も久尓加〻リとも訓とる所にれぞ。須。と唱ふるを以て辨ふべし。ちて此二鏡と毋り。木国名草宮よ崇敬きて。解祭る大神ゆアア。と有れば。即神名式よ。

紀伊国名草郡よ。日前神社。名神大。月次。相嘗新嘗。日前ハ。比能久麻と訓べし。そは風雅集よ。當社の神司紀俊文と云し人の哥よ。名草山をるや。榊のおきもせば。神とざゑげき比乃久末れ宮。と訓み。檜隈宮とも云へばゐり。然るを日本紀延喜式ゐぞよ。ヒノヽへを訓ゆるハ非ゐア。今はヒノサキノ宮ともまと字音よ。ニチゼンクウを云ふゐり。ニ

国懸神社。名神。大。月次。相嘗。

新嘗。とゐる二社よて。日前と申れた。即謂ゆる天懸神ゐるゲ。国懸神と二社。同域よ。竝坐ゐア。是を以て解祭とは云アア。解字た。説文よ。判也とある義を取りて用ひしれア。前よ此字義を考ふることを忘まて。徵よ解祭と訓しハ。拙ゆき。ちて此二面の神鏡た。かれ石屋戸段ゐ。初度ゐ二面造れるゲ。共ゐ少しとて用らまぞ。次度り造れる八咫鏡を用ひられとる。其初ゆれ二面ゐア。此事第四十五段の傳よ。委く説と

るを見ばし。文ふ。天照大神之前、御霊と有はた是故よて。次度よ造れる八咫鏡た。大御神の御霊實を成れる歟。初度れ二面も。大御神よ捧ゞむ料よ。造れる御鏡ふは故ふ。前御霊と申ゝ義ふ。然ま。バ前、御霊と申れた。天懸、国懸二神ふ係て申べき言ふるよ。天懸、神の処よ。天照大神之御霊とれみ所ア。前、字れきハ。疑ふく後人の写し落せるふ。けて此、二御霊を。天懸国懸、神と申ゝ義た。懸は借字よて。炫ゝふ。其は大御神。石屋よ幽居坐し時ハ。天も国も。常闇と化まるよ彼、御鏡を造ア。招出ん奉ア。しかば。天も国も炫やき徹れる故よ。其を造らせる。石凝度賣、命亦名、天香山、命。れ御父をけ牙ふ。天照国照彦火明、命。と美稱ん〳〵。このば。況て前、御霊と坐ゝ神鏡ふまば。然も稱ふばき物ふ。石凝度賣、命。即、天香山、命よて。天照国照彦火明、命の御子ふること。及その名れ由緒ふど。第三十七段第四十六段の徴。まと傳よ委く説さるを見べし。けて此、御鏡二面共よ。是、時大御神の御神體れ八咫鏡よ副る。皇美麻、命ふ授け降し給牙る隨ふ。その八咫鏡と。同床よ御座しを。崇神天皇れ御世よ。大御神れ御正體を。別處ふ齋ひ奉ア給ふ時よ。今の二面と共よ。三面の御代を摸造しめ賜ひて。其を禁中よ齋き給しゝば。此、時よぞ名草、宮よ拜祭られ給ゝむ。猶委くれ。崇神天皇、巻よ注ふを見るべし。然る尊れ、由來れ御社ふるゞ故ふ。伊勢大御神と同じ樣ふ。神位ふどの議よも及れ爻。今も二社相竝びて。いと嚴重よ立

給牙ゆ。その神職は紀氏よりて代〻紀伊国造と称ふ。手置帆負命は孫天道根命の裔なり。国造を云ふ〻。社務を行ふことは古への状れ存れるなり。天武天皇紀ふ。朱鳥元年七月癸卯。奉幣於居紀伊国懸神。はと百錬抄ふ。長寛元年正月二十八日。紀伊国日前国懸社燒亡。於御正體者奉出畢。ふど見えと。ふ。同書ふ。承久元年五月十四日。有軒廊御卜。日前国懸両社司申云。四月十六日。国懸宮御戸不慮令開御事。ともあり。けて禁中ふ齋祀給牙ふ。御圖象れ御鏡三面を。後ふは三處恐所と申せ。此事も崇神天皇の巻ふ注ふを見べし。○次一鏡及子鈴者云〻は。前段れ。三鏡の中れ。一鏡と子鈴一合の注ふ。○天皇も古事記ふ。天皇命とも書と。師云かくれ如く。命字を添へても書奉れることを。出雲国造神賀詞ふ

も二處の。續紀の詔詞れ中ふぎふも見えと。須賣良美許登と訓ばし。儀制令義解ふ。須明樂美御德。此仮字ハ異国人ノ示さむ料ふ書れとる物と見えて。好字れのぎゆを聚ゆ。とるわどふ。御字ふど清濁さ牙叶む。此字ふ拠て許を渭ふハ非ふり。彩ふ此仮字の事も。馭戎慨言ふ論へと。日本紀竟宴歌ふ。數女良美己度ふぎの。須賣良も須賣良とも。須賣良藝とも申奉れと。まと竟宴哥ふ。須女羅乃支美とも。數梅羅機涙とも。ふ。須賣良朕を。御自も詔ひ。

天皇紀の詔ふ。高天原由天降坐之天皇之御世始而云〻と有るは。邇〻藝命をも。天皇と申せるふと。然て天皇字を當奉とし。いをと上代と事を見えとゆ。若は仁德天皇ふどれ御世ふ。和邇ふぎの如き博士れ。申定ゆ

奉巳しふや有らむ。然るに漢国孔丘が春秋に。かの王を天王と書るあどに本おきて。皇ふ天宇をバ冠ゞ奉れるゝ。彼国にても。遥の後ふ。唐高宗が時に。天皇と云号を。新に立とることと有しゝども。本と巳應むぬ称ある故に。末通らげ巳しを。為ゞ吾須賣良等れ此御号ぞ。眞の理ふゝあふひて。天地のかぎり。竪にも横にも往通巳足はして。動くおとあく。変る事ふき大御号にむ有ゝ巳。○御食津神云く。此處は神の名を云ふゝ非ず。津む之に通ふ辭にて。其一ツ鏡と。子鈴一合と二種む。天皇れ御食の神として。朝夕れ御食の護ゞ齋祭る大神ぞと言る意ふ巳。斯て其齋ゞる社む。下れ二社ふ巳。○巻向穴師社む。巻向社。穴師社と云ばきを。省妃て云ふ雅言あり。神名に。伊邪那岐伊邪那美命。大汝少汝命ふど申れと。同じ格ふり。巻向は。古事記書紀ともに。纒向ゞ書て。垂仁天皇景行天

皇れどの宮敷坐る地にて。大和国城上郡ふ有巳。雄略天皇巻三重媛ゞ歌ふ。麻岐年久とあるに依て。其訓を知ばし。万葉七に。動神れ音のみ聞し巻向之檜原山を今日見ぬるかも。十ふ。巻向れ檜原ふ立ふ春霞。これにて。古く名高ゝ巳し地ふる事と知べし。はと七に。三毛侶の。其山ふみに兒等ゞ手を巻向山は繼の宜しも。まことに此哥れ如く。巻向山む。三諸山れ東北方に並べる山ふ巳。はと巻目れ由槻ゞ高に。れゞ猶多かり巳。向を目とも書るに就て。モクゞ訓む非れり。と縣居翁も。師も云れとり。ちて此社む。神名式ふ。大和国城上郡に。巻向坐若御魂神社。大月次相嘗。新嘗。とある御社是ふ巳。清和天皇紀に。貞観元年正月二十七日。従五位上と見えとり。おは火産靈神と。土神埴山

毘賣神との御間に生坐る神にて。豐受大神の御親に坐
こゝに上に出さゞる如し。第十三段の傳に委く注せるを見べし。即それ處に
說さる如く。其御名を稚産靈神と申けむ。其御子豐宇氣
毘賣神の神德は。大かたまども。其本は。此神の産靈に因て。
其德は成就すと聞もれば。此神の御靈をも。豐受大神
の御靈と共に。授け降し給ふを。通に藝命をと繼て。天
皇命は御食之神と齋祭給ひけむ。豐宇氣神の御靈をも降し給へれど。其
は天照大御神は御食津神として。降し給ひしあり。其由
は雄畧天皇乃御世に。大御神御託まして。丹波國より。外
宮へ迎奉給はむと欲ふまふ時の御言に。我御膳神等由
気大神乎。我許欲を詔へる謂にをりて。大御神の朝夕は
大御膳を。外宮の御饌殿にて造奉るとし。外宮は延曆
儀式に見えさるを。思ひ合せゝ辨ふべし。さて御食の神

を。御食津神と云は。乃と津は通ふ詞に。斯て卷向の地に。
て。御食乃國を。御食津國と云ごとし。斯て卷向の地に。
鎭座し給賜ふる時は詳ならぬ。若は景行天皇は御世
おどふや。其は此天皇さゝふ日代大宮を數賜ふまバ乃
ち。彼大膳職に坐ける御食津神も。此御世に齋祭られしを
と。高橋氏文に見えて。此天皇の御卷。七十二年は處に
出せるをも。思ひ合せべし。○穴師社は。式に。大和國城上郡に。卷向社
ふ並ばて。穴師坐兵主神社。名神大月次。相嘗新嘗。と載ら
れさる御社是なり。清和天皇紀に。貞觀元年正月二十七日。從五位下勲八等穴師兵主神正五
位上。と見えさゆ。万葉七に。痛足河く浪立ぬ。卷目は。由槻が高に
雲居立らしぬと卷向は病足之川も往水の。云く。十二に。
纒向の痛足乃山ゆ。古今集採物歌に。卷むくは穴師の山

れ山人と。人も見るゞふ山葛せと。れど詠みて。巻向の地と相連れる地ゐ。是我以て其山を。穴師乃山とも。巻向山ぞも云ひ。其河を穴師之川ぞも。纒向河ぞも詠。ゐ。ぞ聞えと。其ゐまと七巻ゐ。巻向之川音高しと毛詠とるゐて知べし。師云。纒向川。穴師川とも云。巻向山より出て。穴師村を經て。西ゐ流ぎとり。ちて此穴師巻向れ二社をも。解祭と云へ依れ。此二社の御靈實もと禁中ゐ。一所ふ齋祭ゐ賜ひし。を。地ハ相連ゐれど。別社ゐ齋ひ奉られし故ゐ。かく云へゐ上ゐ見えとる名草宮の御事を。解祭ると云へるふ相照して。此旨を曉依ばし。縣居翁れ神遊考ゐ上ゐは古今集採物哥を引ゐて。此穴師山の神祭ハ。上代公ゐ重く崇ゐ給へバ。其御祭ゐれ人と。人も見むを。思わしき事とさせ給へバ。人も見るゞゐと詠るゐや有む。山人とは。其神事ゐ。ゐて。人も見るゞゐと詠るゐや有む。山人とは。其神事ゐ仕奉る。神主祝部ゐぞれ下ゐ仕ふる人ゐりぞて。俄式。平野祭條の文を引れとり。偖まと巻向社ふ祭る神ゐ。式ふ其御名を正ふ載されとぞバ。著明ゐ知られ給ゐれど。穴師社ゐ祭る。兵主神と申ゐ。餘の正し神典ふ見え給ゐ。前ゐ史記封禪書漢書郊祀志れどゐ。玄家ゐ祭る八神れ名を載して。一曰天主。二曰地主。三曰兵主。云〻と見とるゐ。若は後ゐ。此兵主を祭れる社ゐらむゐぞも思ゐぞど。大嘗の相嘗ゐ頒り給ふ神等ゐ。さる外國籍ゐる神を祭れる社とて。一社ゐ有こと無く。皆然るばき由緒ゐ。然ぞど天照大ある神ゐちふ坐ば。其兵主ゐハ非らぞ。御神の。此時かく皇美麻命れ御食之神と。副て降し賜ゐる。二御靈れ一神ゐ坐せぞ。由ゐ有ら免ぞ思ふゐ。度會延經ゐ神名式考證ゐ。此社の所ふ。建速須佐之男命れ。食物を大宜都比賣神ふ乞ひて。殺し給ゐ依事と。右の大倭

本紀注とを引きて。謂ふ。兵主神ハ素盞烏尊ぉ。諸神記ル。八千矛神を祭るに當らば。其に穴師社と巻向社と。一山に係る兩地ぉ祭ぃ。まと同郡ぉ。稔代神社。穴師大兵主神社相竝び。稔代神に。御食津神ぁり。○今云稔代ハ。美加志い呂ぇ志を一説に省けるぁ記。続紀十八ぉ。御戸代田二町。祈年祭祝詞ぉ。皇神能御刀代ぁれど見えとる是ぁり。倭姫命世記ぉも。數見えと。近江国野洲郡ぁる兵主神社を。今俗ぉ閉曾村天王社と云ふ。世ぉ素盞烏尊を。牛頭天王と稱ふ。土民の言傳ぁまぎも。示證と爲べし。今云。素盞烏等を。牛頭天王と称ぎとハ。吉備公の唐土ぉ渡ゆて。曆法を傳ぎ來られし時よりの事ぉて。世俗ぉ云ふも。本拠ぁき事ぉ非ざること。既ぉ第六十七段ぉ説とぁぐ如し。はと播磨国餝麻郡ぉ。射楯兵主神社二座。とぁぁ射楯に。素盞烏尊帥子五十猛神。到

於新羅国とぁる。五十猛と言相渉ぃ。出雲国ぉ。韓国伊太氐神社を云あぃ。伊太氐。神と申ぷ神社。ぁぁ數あり。信ぉ五十猛。神ぉ坐ことと。第六十七段ぉ。既ぉ云るを見べし。然れど兵主神は。素盞烏尊ぁぁことと著明ぁめと云ぃ。此も。もと漢文ぉて。考證れぁ長ぁるを。其ぎ中ぉ言ひ得とりと思ぇる。限りを抄出て。かくは記せり。此考ぁ信ぉ然るぱし。然るは上ぉ出とる如く。須佐之男命に。大宜都比賣神。示名。宇気母智神。示名。豊宇気毘賣神。を斬給ひしぉ依て。其神の産霊に御徳顯れて。穀物を始め種々に物の生出しを。大御神のそを皆取ぇ。穀物養蠶の道をも興し賜ぁるを。須佐之男命。それ荒魂の進びぉ。其を穢く宜ら無事ぉ所思して。妨げ給ぁる故ぉ。大御神に。石屋戸

ふ幽居まち〳〵を。八百万神議り出奉れる後ふ。須佐之男命よ。千座の祓物を負せ。手足れ爪をち牙よ令抜ゑるよ。須佐之男命。其和魂相助けて始ゑて。上件の非態ゑ卍ける事をし御覺卍坐て。此御国よ降坐る後ち。御自も御田作らし。朝夕の御食をも定賜ひしゑと。既よ出とふ如く形まむ。是られ事ども。第四十段より。次〳〵の段〳〵よ説とる中よも。第五十九段。第六十二段。第七十三段ゑどよ注、るを見べし。天皇祖神ゑちれ神慮よ。豐宇氣神のさふ御德の顯れ卍ゑふ事は。須佐之男命れ御態よ因れる事ゑし有れバ。其和魂と。豐宇氣神の德れ本とふ。御親れ御靈を配せて。天皇命れ御食之神と爲て。副降し賜牙るれふ

ふし。若然らバとゑてハ。須佐之男命を。若御竈神よ配斎ひて。御食津神と称ゑべき理ふし。此由緣を深く思ふべし。若ゑれ考牙當卍れむ。兵主は。字れ隨よ。都波毋能奴斯を訓ふし。其は都波毋能とハ。摘羽物の。美を省ける言ゑて。矢を云ゑと。既よ云ふ如くれるゞ。此れ第百三段。積羽八重言代主神の御名ゑ。説とる所よ云牙りき。是よ卍轉りて。劔鉾れ類ハ更ゑ卍。總て武具物をいふ稱と卍れ卍。まと其を用ふる人れ稱とも成れり。諸越よて兵字を用ふる趣も。是よれゑじ。其れ字書戎器也。世本。蚩尤以金作兵。兵有五。一弓。二殳。三矛。四戈。五戟又刀劔曰短兵。又執兵者亦曰兵。ゑど有。よて知べし。然れバ。須佐之男命よ。兵主てふ名我負せて。若御魂神と共ふ。御食津神と稱せるは。其兵を用ひ賜牙る御稜威を。

美稱せる御號とおそ思れ法主。抑伊邪那岐大神一ゑび兵を用ひて火神を斬給へるバ其火天地の間に散滿て万物の生出る機運を與し速須佐之男命兵を用ひて豊受神を斬給ふに因て青人草の衣食住れ道ハ具れり兵器を用ふ德用おおよ所なるゝ道に志ある武士おゝび此道理を思ふべき事ふおそ。ちて鏡と子鈴との中に何ゝ若御魂神の御靈實兵主神の御靈體を云おゞ。詳ら祢ど。一鏡及子鈴とのゝ。卷向穴師とのる次第にをゝて思ゞば。鏡ハ卷向社。鈴ハ穴師社ハ御靈體ふ法事と聞えとゝ。但しおハ後人猶ちとく考ふべし。て舊事紀ハ天神本紀に。天忍立命。纒向神主等祖と見え。天忍立命ハ天太玉命の子ゝあること既に第六十一段に注せるを見べし。姓氏錄和泉國神別に。穴師神主。天富貴命五世孫。古佐麻豆知命之後也をのゝ

ゝ。天富貴命まと太玉命の孫ゝあること神名式に。同國和も第六十一段に注せるを見べし。泉郡に。泉穴師神社二座。まと此に竝びて。兵主神社と申ハも有ゝ。仁明天皇紀承和九年十月奉授和泉國无位穴師神從五位下清和天皇紀貞觀七年二月和泉國從五位下穴師神從五位上同年六月奉授正五位下おど見えとゝ。泉穴師神社と號とゝ法ハ。大和國ハ穴師社を泉國に移せる故に かく稱せゝ。此例外にもいと多ゝゝ。然れど姓氏錄に。穴師神主とのるハ。此社の神主にて。此かの纒向神主家をゝ派れゝむ。然れバこそ。共に太玉命の末ゝハ有ゝゝ。猶第六十斯て泉穴師神社を。二座とのの四段に云ゝるを見るばし。るハ。卷向社を併せて二座おるばし。其ハ穴師神主ハ纒向社の神主より派れとり。と聞もるを以ても悟りおべし。二神を一社に齋ひて。其一神の名を社号に用とる類も。數るに暇のらず。

然るはさ別よ。兵主神社の竝立あるは。後よ異あ由
有ぴて祭れぴと聞も。然る例まと多かぴ（玄蕃式よ凡新羅客入朝者給神酒其釀酒料之稻と見えとる中よ和泉国安那志一社あぴ此由緒ハ未考へ得ず）偖まと令集解
に。仲冬上卯相嘗祭條よ。釋云。穴師（神主）巻向（神主）恩智（神主）云く。
已上神主等請受官幣祭と云ふ事なぴて。文れ連きを思ふ
よ。恩智社も。巻向社を移し祭れる社あるばし。然るは。此
社神名式よ。河内国高安郡よ。恩智神社二座竝名神大月
次相嘗新嘗とぴて。御紀よ。此を恩智大御食津彦命。恩
智大御食津姫命。と有れぢあぴ。（其文れ文徳天皇紀よ嘉承三年冬十月河内国恩智大御食津彦命恩智大御食津姫命神等並正三位清和天皇紀よ貞観元年正月奉授正三位勲六等恩智大御食
津比古神恩智大御食津比咩神並従三位あど見も。恩智
れ地名あり。河内志よ。恩智山あぴ。あの御社今恩智村と
云ふよ在と考ふい。）此は疑ひ無く若御魂神を男女二神ふ祭れ
るふぴ。（此ふ社傳よ中臣大御食津臣命ありと云由ふれど其れ推量りの説りて信るよ足らぢ。）ちて
姓氏録和泉国天神ふ恩智神主高御魂命兒伊久魂命之
後也と有るはふれ社の神主を云ぴ。（ふ第百五段の傳よ云へるを見べし。）
○天孫降臨追次ぢ考
鐵胤云。西田直養れ説ふ。天孫降臨の處ふ。記傳よは父尊
ふ代て。此尊を降し奉ぴ給ふれ。如何ふ有る故りこの。傳ふけ
ぢば測ぴがふしとれみ有て。考説ふし。故ぢらく此時
れ趣を考ふるよ。忍穂耳命ハしめ。父命よぴ。天降りて。此

中国を知らしめ給し。とれ大命を蒙り給ひしを降り給て
ゑして。いまゞ襁褓より坐まに。最も稚き邇〻藝命をし。我
代よと詔ひ出し給ふること。何ふゆ〻〻訝なき事なり。
まと大御神も。御否みもあく。速よ。乞はしのまよ〻〻許
し給ひて。忍穂耳命をむ。天御国ゑ留まらしめ給ひ。また
治まりとりとハ云へど。甚も喧がしかりし此御国より。甚
いむけなき大御孫を。眞床たふ衾より包み給ひて。降し給
ふるハ。是むと甚く訝しき事ならゑや。故畏み〻も。推量り考ふるに。高木
大神は。天の御国より於てゆ。最尊く。事とにる時は。大御神
と竝び坐て。万の執行むせられ。早く天地をさへより造り給へる御功む申にも更
あり。譬へて申さば。大御神の御後見とも。稱ぬ法き神より坐
せゆ。然あるより依てむ。いゞて此大神ハ御皿統を。中国の

大君をしめ。崇ま奉らは欲く。御心ハ底より思ひし召し
より。表より然む宣給ハ初ども。其とれく。己命ふ替奉て。
天降し給むむ事を。御父の大御神より。申し試み給ひたる
を。其御慮ハ如く。大御神も。御心ハ中ふ。深く悦バし給ひ
て。速ふ。邇〻藝命をバ。天降し給ひし也ハ。抑忍穂耳命も速
須佐之男大神と。劔玉御誓の時ふ。大御神の。左ハ御美豆
良の玉より。生出給ひしして。正く大御子より坐まにも
れの。高木大神の御皿統む坐まさゑ。かくて此邇〻藝命はも。高木大神の
御女万幡豊秋津比賣命の御子。王依毘賣命ハ御腹より。成
坐給ひたれゞ。即高木大神より。御曾孫より坐ませ。一説より
御孫あり。然して大御神ふも。御正統ハ御孫あれゞ。兩方ふ付

てめ。御皿孫よ坐まれを以て。長へよ。中津国の大君と。成し給むれ御心あるばし。今も世ふ。嫡孫承祖と云て。孫の家を継ぐ事なるも。深き幽契あれ事あるゝ。故翁れ在そりせむ。其御定免を承賜ハらま欲きものをいと惜しと云おこされとり。鋏胤謹ミて考ふるふ。此考、案はさほ説よて。先人の見給ハ〳〵。必印可し給ふべき事と所思ゆる侭ふ。今あ〳〵よ書添ふるよお年。時は弘化の二年と云年の八月。ゆ已。

○鋏胤云。おもれ廿六巻を刻本と爲て。世ゑ弘ゑ依者は。讃岐国多度郡大麻村ふ依氏家雄足。はさ那珂郡琴平山ふ鎮坐に。金刀比羅大神ふ仕ゑ奉る。琴陵内祝山下盛好。れよび其妻延。はさ伊豆国君澤郡三津村ふ世々住免る。羽田直秀ら外已。

国立公文書館
National Archives of Japan